

野々市市

新庄カキノキダ遺跡

2019

石川県教育委員会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

しんじょう
新庄カキノキダ遺跡

2 0 1 9

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は新庄カキノキダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県野々市市新庄1丁目地内である。
- 3 調査原因是二級河川高橋川広域河川改修事業で、同事業を所管する石川県土木部河川課（安原・高橋川工事事務所）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成26（2014）年度から平成30（2018）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿作成および報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部河川課（安原・高橋川工事事務所）が負担した。
- 6 現地調査は平成26・27年度に実施した。期間・面積・担当は下記のとおりである。

【第1次 平成26年度】

期　間　平成26年8月4日～同年9月16日

面　積　510 m²

担　当　調査部県関係調査グループ

澤辺利明（主幹）、中森茂明（専門員）

【第2次 平成27年度】

期　間　平成27年4月15日～同年8月18日

面　積　2,690 m²

担　当　調査部特定事業調査グループ

水田　勝（専門員）、林　大智（専門員）、神谷英生（嘱託調査員）

- 7 出土品整理は第1次調査分を平成27年度に調査部県関係調査グループが、第2次調査分を平成28年度に特定事業調査グループが担当した。

- 8 報告書原稿の作成は平成29年度に、報告書編集・刊行は平成30年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。原稿は、第2章第2節を岩瀬由美（県関係調査グループ主幹）が、他は澤辺が作成した。編集は澤辺が行った。

- 9 調査には野々市市教育委員会の協力を得た。

- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系に準拠した。

(2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。

(3) 遺構の名称は、下記の略記号に算用数字を付して表記した。

SB：掘立柱建物、SI：竪穴建物、SK：土坑、SD：溝、P：柱穴・小穴、SX：その他・不明遺構

(4) 遺物の報告番号は挿図、出土遺物観察表、写真で共通番号を用いた。

(5) 遺物実測図は、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きで示した。

(6) 出土遺物観察表には出土遺構、遺物種類、器種等のほか、出土品整理時の図化番号を記載した。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 現地調査の経過	1
第3節 出土品整理等の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	7
第1節 概 要	7
第2節 検出遺構・遺物	8
第3節 ま と め	32

写 真 図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査区の位置	2	第14図 遺構図2 (S I 2)	19
第2図 工事計画と調査区の位置	2	第15図 遺構図3 (S B 1)	20
第3図 遺跡の位置	4	第16図 遺構図4 (S B 2・3)	21
第4図 調査地周辺の遺跡	6	第17図 遺構図5 (S B 4・5)	22
第5図 調査区全体図	10	第18図 遺構図6 (S B 6~10)	23
第6図 調査区個別図1 (D 1区)	11	第19図 遺構図7 (S B11~14)	24
第7図 調査区個別図2 (D 1・2区)	12	第20図 遺構図8 (SK 1~9)	25
第8図 調査区個別図3 (D 2区)	13	第21図 遺構図9 (S D46・47)	26
第9図 調査区個別図4 (A・B区)	14	第22図 出土遺物1 (S I、SK)	27
第10図 調査区個別図5 (C 1区)	15	第23図 出土遺物2 (S D)	28
第11図 調査区個別図6 (C 2区)	16	第24図 出土遺物33 (S X 1、P i t)	29
第12図 調査区個別図7	17	第25図 出土遺物4 (P i t、包含層他)	30
第13図 遺構図1 (S I 1)	18		

表 目 次

第1表 調査・整理体制	3	第3表 出土遺物観察表	31
第2表 方形・円形建物一覧表	9		

図 版 目 次

図版1 遺構1	図版4 遺構4	図版7 遺構7
図版2 遺構2	図版5 遺構5	図版8 出土遺物
図版3 遺構3	図版6 遺構6	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

新庄カキノキダ遺跡の発掘調査は、二級河川高橋川広域河川改修工事に伴い、石川県教育委員会（以下、県教委）及び（公財）石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が実施したものである。

二級河川高橋川広域河川改修工事は、昭和49年（1974）7月の高橋川氾濫による甚大な浸水被害を契機とし昭和53年度から本格的に開始された。平成7年度までに下流の伏見川合流地点から碇川合流地点までの3.8km間の改修工事が完成しており、平成8年度からはこれより上流の白山市曾谷町地内までの2.88kmについて第3期改修区間として河道拡幅、護岸整備等の事業が進められている。

石川県教育委員会文化財課（以下、文化財課）では毎年、関係部局に対し実施予定事業の照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記河川改修事業についても所管の石川県土木部河川課と協議しながら、順次、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認しており、平成24年には下新庄フルナワシロ遺跡の発掘調査が行われている。新庄カキノキダ遺跡の所在する野々市市新庄1丁目地内については左岸側に川幅が拡幅され、その護岸工事、市道付け替え等が計画された。当該区域は昭和48・49年に土地区画整理が広範に実施された場所であり、高橋川については幅数mの用水であったものが市境として直線的に整備されたものである。従来、埋蔵文化財の情報が希薄な区域であり、分布調査等の実施により事前にその有無の確認が必要と判断された。現地工事を所管する安原・高橋川工事事務所（以下、安高事務所）から依頼を受けた文化財課では、平成26年2月13日に重機を用いた試掘による分布調査を実施。新発見の埋蔵文化財包蔵地を確認し、周辺の小字名より「新庄カキノキダ遺跡」とした。文化財課は安高事務所に遺跡の分布を確認した旨報告するとともに、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直し等を要請した。以後、協議を継続した結果、現状でルート変更は困難であることから、当該箇所については事前の発掘調査を行い記録保存することとなった。

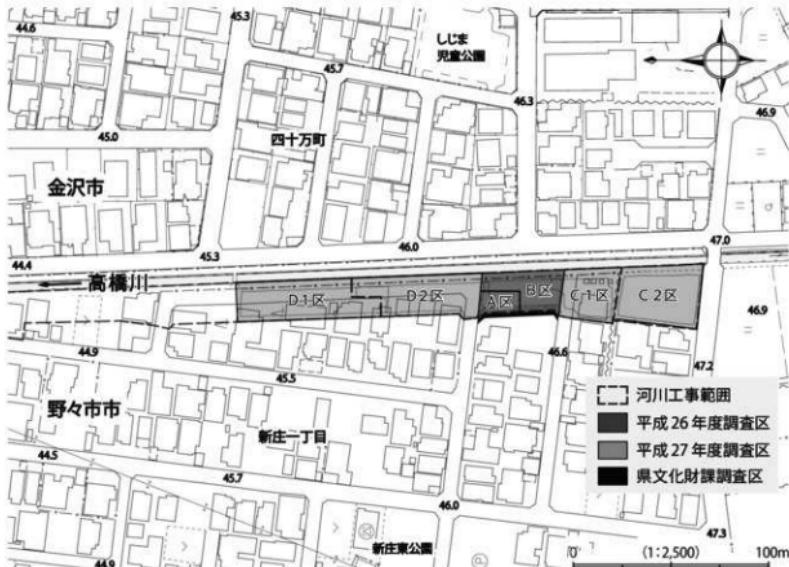
安高事務所からは平成26年3月13日付けで文化財保護法第94条に基づく発掘通知が県教委あてに提出され、それに対し県教委は同日付けで発掘調査が必要である旨通知した。県教委から発掘調査の委託を受けた埋文センターは、平成26年6月26日付けで県教委宛に発掘調査届を提出、同日付けで県教委から通知を受けた。平成27年度調査に関しての発掘調査届は平成27年4月15日付けで県教委あて提出し、同年4月22日付けで県教委から通知を受けた。

第2節 現地調査の経過（第1・2図）

平成26年度（A・B区、文化財課調査区） 事業者からの依頼を受けた県教委の委託事業として、平成26年度に埋文センターが実施した。調査面積は文化財課調査区を含め510m²である。調査は澤辺利明、中森茂明が担当した。7月23日に安高事務所、文化財課、埋文センターによる現地協議を行い、河川工事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。調査区は手掘り排土置き場の都合等からA・B区に分割し、A区から調査を実施した。8月2日から表土除去着手。8月5日に作業員投入。8月11日にA区の空中写真測量を実施。統いてB区の調査を行い、9月2日に空中写真測量を実施。補足作業を終え9月8日に発掘機材搬出、以後、現場事務所等撤収、9月16日に安高事務所に現場を引き渡し現地調査を終了した。なお、河川工事に係り調査区西縁には道路側溝が新設されたが、この側溝箇所（約50m）については、隣接する家屋建設等に先立つ施工が必要



第1図 調査区の位置



第2図 工事計画と調査区の位置

であったことから、文化財課が埋文センター調査前の4月3日および7月23日に工事立ち会い調査を実施した。

平成27年度（C・D区） 平成27年度に埋文センターが実施した。調査面積は2,690m²である。調査は水田勝、林大智、神谷英生が担当した。4月15日に安高事務所、文化財課、埋文センター及び河川工事業者による現地協議を行い、河川工事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。特にD区については舗装や側溝、電柱、水道管などの構造物が存在しており、事前に、安高事務所においてこれらの移設あるいは撤去を行うこととなった。

調査区は平成26年度調査区（A・B区）を挟み南と北に二分され、南側をC区、北側をD区と呼称し、それぞれを更に1・2区に分割した。発掘調査は河川工事とのすりあわせから上流側のC1区から着手した。5月11日から表土除去開始。5月12日に作業員投入。5月22日にA区の空中写真測量を実施。ついでC2区の調査を行い、6月18日に空中写真測量を実施した。このC1・2区(1,200m²)については6月23日付けて安高事務所に現場を引き渡した。続いてD1区の調査を行い、7月15日に空中写真測量を実施。このD1区(1,030m²)についても7月17日付けて現場を引き渡した。最後にD2区(460m²)の調査を行い、8月12日に空中写真測量を実施した。その後補足作業を行い8月18日に安高事務所に現場を引き渡し現地調査を終了した。

第3節 出土品整理等の経過

出土品整理、報告書原稿作成、報告書編集・刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。出土品整理は、現地調査実施年度に出土品洗浄を行い、遺物の記名・分類・接合・実測・トレースおよび遺構実測図のトレースについては、平成27年度に平成26年度発掘調査分を、平成28年度に平成27年度発掘調査分を対象に実施した。報告書原稿作成は平成29年度に、報告書編集・刊行は平成30年度に実施した。

(G: グループ, L: リーダー)

年 度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 27 年度
業務内容	発掘調査	発掘調査	出土品整理(平成 26 年度調査分)
業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
統括	小嶋 隆司(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)
事務	栗山 正文(事務局長)	笠親 利雄(事務局長)	笠親 利雄(事務局長)
職務	山口 登(総務G L)	長嶋 誠(総務G L)	長嶋 誠(総務G L)
経理	長嶋 誠(総務G 主幹)	東 賢吾(総務G 主幹)	東 賢吾(総務G 主幹)
担当	福島 正実(所長)	福島 正実(所長)	福島 正実(所長)
	藤田 邦雄(調査部長)	藤田 邦雄(調査部長)	藤田 邦雄(調査部長)
	松山 和彦(監修係調査G L)	川畠 誠(特定事業調査G L)	松山 和彦(監修係調査G L)
	澤辺 利明(県関係調査G 主幹)	木田 勝(特定事業調査G 専門員)	県関係調査G
	中森 広茂(県関係調査調査G 専門員)	林 大智(特定事業調査G 専門員)	

年 度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
業務内容	出土品整理(平成 27 年度調査分)	報告書原稿作成	報告書編集・刊行
業務主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中新太郎)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中新太郎)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中新太郎)
統括	柴田政秋(専務理事)	柴田政秋(専務理事)	細野政一(専務理事)
事務	笠親利雄(事務局長)	笠親利雄(事務局長)	笠親利雄(事務局長)
職務	長嶋 誠(総務G L)	横山謙(総務G L)	山口 登(総務G L)
経理	西 邦弘(総務G 専門員)	西 邦弘(総務G 専門員)	西 邦弘(総務G 専門員)
担当	福島 正実(所長)	藤田邦雄(所長)	藤田邦雄(所長)
	藤田邦雄(調査部長)	垣内光次郎(調査部長)	垣内光次郎(調査部長)
	川畠 誠(特定事業調査G L)	久田正弘(県関係調査G L)	久田正弘(県関係調査G L)
	特定事業調査G	県関係調査G	県関係調査G

第1表 調査・整理体制

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新庄カキノキダ遺跡は野々市市新庄1丁目地内に所在する。野々市市は平成23年11月1日に旧野々市町が市制に移行し誕生した。東西4.5km、南北6.7km、人口55,099人（平成27年10月）。白山に源を発する一級河川手取川により形成された手取川扇状地北東部の扇央から先端部に立地する。市内最高所は約50m、最も低い地点は約10m、現在は平坦で緩やかな傾斜地形であるが、かつては手取川やそこから分岐した大小河川が洪水や氾濫を繰り返すことによって形成された微高地、微低地が混在する地形であった。

遺跡の所在する新庄地区は市域南東端を占め、扇状地東側に沿って展開する富樫山地山裾に近い。地区的西側には木呂川が流れ、東側は富樫山地を北流する高橋川を境に金沢市に、南は白山市に接する。以前は水田地帯であったが、広範に土地整理事業が実施され、現在は住宅地が広がり商業施設も多数存在する。新庄の地名は貞和（1345）年「足利尊氏袖判下文写（如意室珠御修宝日記）」にみえる。加賀国守護の富樫氏春は足利尊氏より「加賀國富樫新庄」の地頭職を与えられたが、この「富樫新庄」が野々市市新庄付近に比定されている。近世には上新庄村、下新庄村、明治以降富奥村新庄、昭和30年に野々市町新庄、そして、区画整理が進んだ昭和53年にはかつての上新庄村地区が新庄1・2丁目および3丁目の一部に、下新庄村地区が新庄3～6丁目となった。

調査地は高橋川左岸に接する道路および宅地であり、南から北に向かって緩やかに傾斜し、遺構検出面の標高は南端で45.8m、北端で43.9mを測る。

第2節 歴史的環境

本遺跡が手取川扇状地扇央部に立地することから、主に扇状地に展開する遺跡の動向を概観することとする。

縄文時代には手取川は扇状地の扇央稜線、現在の白山市鶴来地区から同市徳光町を結ぶライン付近を流れていると推定されており、ライン南側に比べて地盤の比較的安定していた北東側の中でも、地下水の自噴地帯である扇端部に当期の遺跡は多く展開している。扇状地から外れる富樫山地麓の額谷カネカヤブ遺跡（63）で中期中葉頃の堅穴建物1棟が検出されている他、扇央部に位置する下新庄アラチ遺跡（8）、上林新庄遺跡（4）、粟田遺跡（10）などでも後晩期の遺物が出土している。詳細な生活様相は不明であるが、粟田遺跡では打製石斧の素材採取場所が確認されており生業の一端を垣間見ることはできる。また、本遺跡でも後期の土器や晩期の可能性のある円形建物群が確認されたことから、扇央部でも今後居住地が発見される可能性が高い。

弥生時代においても、地下水位が低く疊混じりの土壌が広がる扇央部は生産性に制約があるためか、扇端部のような大規模集落の展開は確認されない。粟田遺跡で遠賀式の系譜を持つ土器を1点確認した他、上林遺跡（9）でも前期の遺物が出土しており弥生文化が波及してきた痕跡が認められ



第3図 遺跡の位置

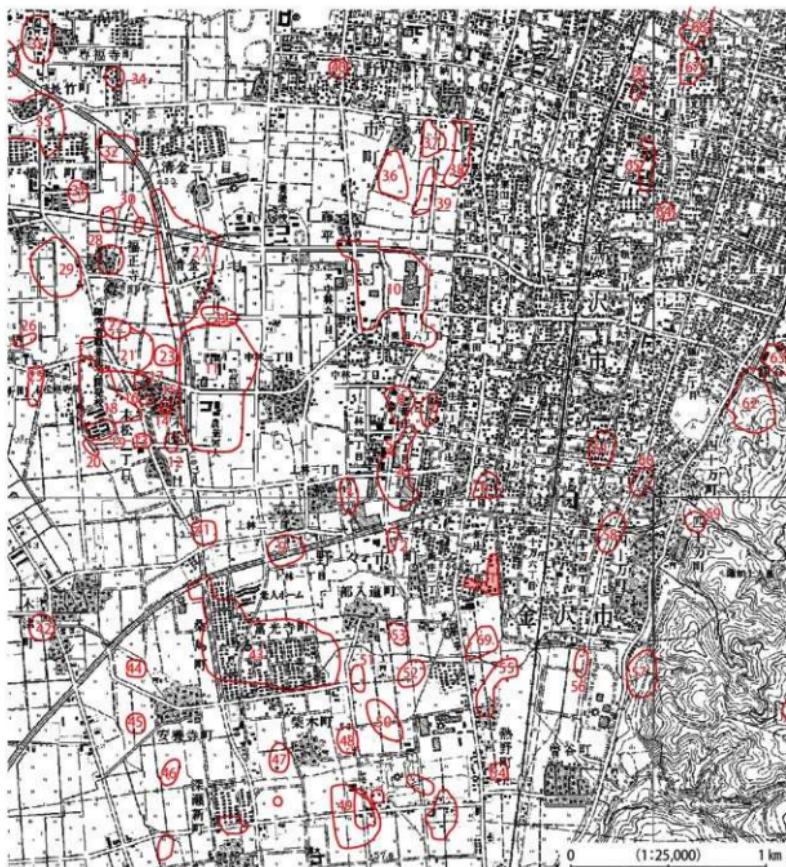
るもの、空間的、時間的な広がりは見られない。やや下流域に位置する大額キヨウデン遺跡(64)や山麓部の額谷ドウシング遺跡などで後期から終末期の集落が知られるが、扇央部南よりに位置する木津遺跡(41)や上新庄ニシウラ遺跡(2)で弥生時代末～古墳時代初頭の集落が確認されるまで、定住の確たる痕跡は認められない。それらの存続期間は極めて短く、木津遺跡で確認された数度の洪水痕跡などから、扇央部でも山側に位置するこの地域は未だ以って開発に困難を伴う地域であったと言える。

続く古墳時代については、約300m南に位置する上新庄チャンバチ遺跡(69)で平成29年に古墳時代初頭の前方後方墳が確認された。従来、前期古墳としては市北部に位置する御経塚シンデン古墳が知られ、調査地周辺においては、7世紀前半頃に比定されている上林古墳(5)やほぼ同時期と推定される末松古墳(15)などの後期古墳のみであった。この地の開発は7世紀代に始まるとみられてきたもので、新庄地区での古墳の発見は一帯の開発の端緒に見直しを迫るものとなる。末松古墳周辺では遺跡が密集し末松遺跡群と総称されるが、その中で末松ダイカン遺跡(21)、末松福正寺遺跡(22)で7世紀初頭～前半の遺物が出土しており、当期から集落が形成され始めたことが分かっている。7世紀後半には末松A遺跡(11)、末松ダイカン遺跡など、末松遺跡群で集落の拡大が確認されると共に末松庵寺(18)が創建される。この末松遺跡群の東側に位置するのが上林・新庄遺跡群である。上林新庄遺跡、上林テラグ遺跡(3)で末松遺跡群と同じ7世紀初頭から前半にかけて小規模集落の形成が確認された後、7世紀後半以降に集落の規模を拡大していく。やや遅れて8世紀に成立する上新庄ニシウラ遺跡、下新庄アラチ遺跡、下新庄タナカダ遺跡(7)も同じ微高地に立地し、盛衰を共にすることから、一連の集落跡と認識されている。下新庄アラチ遺跡で確認された8世紀から9世紀にかけての大型建物は、周辺を掌握する有力者の住居と推測されており、上林新庄遺跡の南部エリアに立地する専業的な鍛冶遺構はその有力者が統率していた工人居住地と理解されている。

開発が7世紀後半以降に本格化することは扇央部全体にも共通するところである。地下水位の低い疊混じりの土壤を開墾できるだけの道具と技術の進歩を背景として在地領主達が開発に着手した後、計画的に配置された集落構造に変遷を遂げることについて、末松A遺跡で近江・丹波系などの移民の居住が確認されることから、国家的な権力の介在が指摘されてもいる。また、7世紀後半から8世紀にかけて造営を開始した集落の多くが9世紀末までに衰退する点にも一致をみる。

一方、9世紀末以降には三浦・幸明遺跡、橋爪ガンノアナ遺跡、安養寺遺跡(43)などで新たな集落展開がみられ、11世紀代まで継続していく。三浦・幸明遺跡では10世紀前半以降、用水の岸辺に大型掘立柱建物が継続して建設されることや、高級陶器の出土等から開発領主クラスの居宅と推定され、東接する橋爪ガンノアナ遺跡を含めてエリア比定される林郷内の拠点的な集落であったと想定されている。安養寺遺跡は、上林遺跡などと共に安養寺遺跡群と総称され、詳細は不明ながらも豊富な縁灰釉陶器の出土などからこのエリアにも10世紀から11世紀にかけての拠点的な集落が展開していくことが推定される。それら拠点的集落とみられる遺跡では土師器の一括廃棄・埋納遺構が複数基確認されており、何らかの祭祀を繰り返し執り行える階層であったことを示唆してもいる。本遺跡のやや下流に位置する新庄フルナワシロ遺跡(6)でも同時期の類似した集落が確認されており、拠点的集落が点在する様相が明らかとなった。

11世紀末から12世紀にかけては荒廃していた扇状地の再開発が行われた時期とされ、再開発に携ったとみられる開発領主層の居館とされる遺跡が数多く点在する。近年の北陸新幹線建設工事に係る発掘調査が扇端部近くの白山市域で進み、用水の整備から始まる扇状地再開発の様子が明らかになりつつある。本遺跡近辺にはこの時期の遺跡は確認できないが、北に約2.2km離れた三納ニショサ遺跡(39)や三納トヘイダゴシ遺跡で13世紀の小集落が形成され、高橋川下流域の扇が丘ゴショ遺跡や扇が丘ハワイゴク遺跡(68)で武士などの居館とみられる鎌倉時代の大型掘立柱建物が検出されている。



(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「松任」・「栗生」・「金沢」・「鶴来」使用)

- 1.新庄カキノキダ遺跡
- 2.上新庄ニシウラ遺跡
- 3.上新庄テラダ遺跡
- 4.上林新庄遺跡
- 5.上林古墳
- 6.下新庄フルナワシロ遺跡
- 7.下新庄タナカダ遺跡
- 8.下新庄アラチ遺跡
- 9.上林遺跡
- 10.栗田遺跡
- 11.末松A遺跡
- 12.末松しりわん遺跡
- 13.法福寺遺跡
- 14.末松館跡
- 15.末松古墳
- 16.末松C遺跡
- 17.古元堂館跡
- 18.末松庵寺跡
- 19.大船館跡
- 20.末松砦跡
- 21.末松ダイケン遺跡
- 22.末松福正寺遺跡
- 23.末松B遺跡
- 24.末松信濃館跡
- 25.橋爪新A遺跡
- 26.橋爪新B遺跡
- 27.清金アガトウ遺跡
- 28.福正寺シンキョウ遺跡
- 29.橋爪B遺跡
- 30.福正寺ゴコメマチ遺跡
- 31.橋爪の木遺跡
- 32.橋爪遺跡
- 33.長竹遺跡
- 34.高田遺跡
- 35.専福寺遺跡
- 36.藤平田カシングジ遺跡
- 37.堀内館跡
- 38.三納アラミヤ遺跡
- 39.三納ニショサ遺跡
- 40.三林館跡
- 41.木津遺跡
- 42.法蓮寺跡
- 43.安養寺遺跡(柴木遺跡)
- 44.安養寺念仏林遺跡
- 45.安養寺B遺跡
- 46.安養寺C遺跡
- 47.柴木D遺跡
- 48.柴木E遺跡
- 49.柴木南遺跡
- 50.新荒屋遺跡
- 51.郡入道B遺跡
- 52.郡入道C遺跡
- 53.郡入道A遺跡
- 54.曾谷遺跡
- 55.熱野遺跡
- 56.四十万南遺跡
- 57.四十万ヒッカジ遺跡
- 58.四十万B遺跡
- 59.四十万中世墓
- 60.四十万遺跡
- 61.三十刈遺跡
- 62.額谷遺跡
- 63.額谷カネカヤブ遺跡
- 64.大額キヨウデン遺跡
- 65.額新町遺跡
- 66.馬替遺跡
- 67.届台遺跡
- 68.届ヶ丘ハイゴク遺跡
- 69.上新庄チャンバチ遺跡

第4図 調査地周辺の道路

第3章 調査の成果

第1節 概要

1 調査の概要（第2・4・5図）

遺跡は手取川扇状地扇尖部東端、野々市市南東部にひろがる住宅地に位置する。発掘調査は、市域東端にあって金沢市との境を南から北に流下する高橋川の河川改修工事とともになもので、河川左岸に沿う幅約11～16m、延長約190m、延べ3200m²が調査対象である。平成26年度は発掘区域中程のA・B区510m²を、平成27年度はその両側のC・D区2690m²を調査した。また、これに先立ち平成26年度前半には、A・B区の西側に沿う幅約1mの側溝敷設箇所について県文化財課が工事立ち会いを実施した。

2 調査区割り（第5図）

調査区全体には平面直角座標第Ⅳ系（世界測地系）に合わせた一辺10mのグリッドをかけ、南北帶をX、東西帶をYとし、それぞれ10m毎に数字をつけ、これを組み合わせグリッド名とした。調査区はA～D区に大別し、C・D区はそれぞれ1・2に細分した。

3 基本層序（第9図）

調査地一帯は昭和48・49年の土地区画整理にともなう造成により1m前後の盛土がなされており周辺の地表高は調査区南端で47.2m、北端で45.1m、遺構検出面標高は南端で45.8m、北端で43.9mである。調査区の基本層序についてB区調査区西壁を代表して示した。1層は上部の施設撤去後の盛土。2・3層は区画整理にともなう盛土。第4層は区画整理前の旧表土、5層は遺物包含層で、遺構は5層を覆土とするものが多い。6層を覆土とする遺構も少数存在する。7層は地山土からの漸移層である。A層は地山土であり淡黄白色シルトである。地点によってはA層の下に手取川扇状地に由来する砂礫層が存在する。

4 遺構・遺物（第5図）

南北に細長く等高線に直行する調査区では地点毎に様相を変えている。土地区画整理時に全般に削平され、A区より南側は高橋川の旧流路により幅5mほどで削平・搅乱を受けていた。全域に分布する大小のピットには平・断面において柱跡と観察されるものが多いが、抽出できた建物は少ない。その中でA・B・C区において縄文時代後・晩期と推定する方形建物1棟、円形建物12棟を復元した。D区では縄文時代後期中葉の土器棺墓とみられる遺構や弥生時代終末期の堅穴建物1棟、弥生もしくは古代とみられる平地建物1棟を、A区では平安時代中期の溝を、C区では平安時代中期頃の掘立柱建物1棟のほか多数の耕作溝を検出した。

遺物はテンバコにして1・2次調査各1箱が出土しており内訳は、縄文土器10点ほど、弥生土器10点ほど、土師器約250点、須恵器約60点、打製石斧8点などである。

なお、遺構番号について、2カ年にわたる発掘調査では年次毎に個別に1から番号を振ったが、本報告にあたっては1次調査検出の遺構について、2次調査で付けた遺構番号に続く番号に振り替えた。以下にその内容を記すと、(1次) SD1→(報告) SD46、SD2→SD47、P1→P138、P2→P139、P3→P140、Pア→P141、Pイ→P142、Pウ→P143、Pエ→P144である。

第2節 検出遺構・遺物

1 堪穴建物・平地建物

S I 1 (第5・6・13・22図) D 1区北側に位置する。平面プランは隅丸長方形をなし、長軸8.0m、短軸5.5mを測る。深さは最大で10cm程度で削平を被るとみられる。内部には部分的に幅20cm、深さ10cmの壁溝が存在する。長軸方向に不整梢円形の柱穴2基 (SII-P1 (82×53cm、深さ50cm)・2 (85×67cm、深さ44cm)) が並び、南東辺沿い中央に略長方形の貯藏穴 (SII-SK1 (76×69cm、深さ50cm)) を設ける。炉跡等の施設は確認されなかった。遺物は第22図1に示した弥生時代終末期の蓋が建物北側床面から出土したほか、SII-P1・2、SK1から弥生土器細片が少量出土している。

S I 2 (第5・7・14・23図) D 1区南端でD 2区にまたがって位置する周溝を持つ平地建物である。S D 44 (幅49cm)・45 (幅70cm) 等からなる周溝は不整隅丸方形をなし、溝外側で6.2×6.4m、溝内側で5.1×5.7m、溝の深さは最大で20cmを測る。S I 1と同様削平が考慮されるが、現状で4箇所が途切れ、最大の南側箇所で開口幅1.6mである。内部の柱穴等は明確にできず、炉跡等の施設も確認されなかった。遺物はS D 44北端とこれに接するP 131・132から第23図12の須恵器甕が出土しており古代に属する可能性が残るが、その他の時期のうかがえる土器が田嶋編年(田嶋 1998) VI期以降であることから、本遺構についてはS I 1に近い時期の平地建物の可能性が高いと推定する。

2 掘立柱建物

S B 1 (第5・11・15図) C 2区北端に位置し、重複する耕作溝より新しい。P 35～37 (2間、5.05m、N-4°-W) を建物西側桁柱穴とし、その西側1.2mにP 38～40からなる庇をともなう。建物東側は高橋川旧流路により削平される。柱穴掘方は隅丸方形から梢円形を呈し、長辺61～74cm、北側の柱穴ほど深さを増す。柱痕跡は直径約25cmである。庇柱穴掘方は直径25cmの円形を呈し、柱痕跡は直径約10cmである。柱穴からの出土遺物はないが、S B 1の時期については建物方位やC区からの出土遺物からみて、S D 1に並行する田嶋編年(田嶋 1998) VI 3～VII 1期頃としておきたい。

方形建物 (S B 2)、円形建物 (S B 3～14) (第5・9・10・16～19図)

A区からC 1区北半部には大小ピットが多数分布する。調査地全般は区画整理時に削平を受けていることによるものか、深さ10cmに満たないものも多いが、これらピット群から方形の柱穴配置を持つ方形建物1棟 (S B 2)、円形の柱穴配置を持つ円形建物(布尾2000)12棟 (S B 3～14) を想定復元した。そのうちS B 3・11・13・14では内部に方形の柱穴配置を見い出し破線で示した。調査区内からは弥生時代後期後葉、平安時代の遺構・遺物のほか、绳文時代後期中葉前半の土坑墓SK 7、後期後葉八日市新保式土器、晚期後葉の下野式土器、条痕をもつ土器、打製石斧など绳文時代の遺構・遺物が検出されている。新庄カキノキダ遺跡周辺には野々市市御経塚遺跡や金沢市米泉遺跡、新保チカモリ遺跡等並行する時期の集落が多数存在しており、ここで想定復元した方形、円形建物についてはそれら調査事例からみて、当地域において绳文時代後・晩期に認められる掘立柱建物と推定する。本遺跡出土遺物はSK 7出土品を除き少量の微小片であり、それ以上に時期を限定することは難しい。なお、これらピット群中には方形や亀甲形等多角形プランの建物の存在も考慮され、円形建物はさらに増えると考えている。建物配置図は第16～19図に示したが、調査時には建物プランを把握できず土層断面図はあまり作成されていない。代わりに各建物に付随する可能性のあるピットにその深さを、建物円弧と同色の数字で示した。重複するなどし所属建物候補が複数あるピットについては、いずれか1棟の色のみで示した箇所がある。以下にその規模等を表にまとめて記す。

遺構名	跡番号	地区	形状	規模 (m)	面積 (m ²)	備考
SB 2	第 16 図	A 区	方形	1×1間 (一辺4.5)	2025	SB3に重複
SB 3	第 16 図	A 区	円形	直径 6.4	3215	SB2に重複、 内部に一辺2.3mの方形柱配置あり
SB 4	第 17 図	B 区	円形	直径 7.3	41.83	SB5に重複
SB 5	第 17 図	B 区	円形	直径 7.1	39.57	SB4に重複
SB 6	第 18 図	B 区	円形	直径 6.3	31.16	SB7～9に重複
SB 7	第 18 図	B 区	円形	直径 6.9	37.37	SB6・8・9に重複、 P141～143(断面図: 第9図)
SB 8	第 18 図	B 区	円形	直径 7.0	38.47	SB6・7・9に重複
SB 9	第 18 図	B 区	円形	直径 7.9	48.99	SB6～8に重複
SB 10	第 18 図	B・C 1 区	円形	直径 5.5	23.76	P144(断面図: 第9図)
SB 11	第 19 図	C 1 区	円形	直径 9.1	65.01	SB12～14に重複、 P5・20(断面図: 第10図)
SB 12	第 19 図	C 1 区	円形	直径 7.4	42.99	SB11・13・14に重複、 P4・5(断面図: 第10図)
SB 13	第 19 図	C 1 区	円形	直径 5.3	22.05	SB11・12・14に重複、 P4・6・10・26(断面図: 第10図)、内部に一辺 2.2mの方形柱配置あり、P21・28
SB 14	第 19 図	C 1 区	円形	直径 5.2	21.23	SB11～13に重複、 内部に1.6×2.0mの方形柱配置あり

第2表 方形・円形建物一覧表

SB 3～14：平均直径6.8m、平均面積38.26m²

3 土 坑

計9基に遺構番号を付した。遺物が出土していないものもある。SK 8は高橋川旧河道、そのほかは人為による遺構とみるが、SK 7のほかは性格を示せ得ない。

SK 1 (第5・11・20図) C 2区南西隅で調査区西壁に接する。長径 1.25 m、短径 0.72 m以上、深さ 35 cm、不整長円形を呈する。出土遺物はない。

SK 2 (第5・11・20図) C 2区中程西側に位置する。長径 1.14 m、短径 1.08 m、深さ 17cm、不整円形を呈する。土師器塊、内黒土師器塊小片各1点が出土している。

SK 3 (第5・11・20図) C 2区中程に位置する。長径 1.16 m以上、短径 1.02 m、深さ 38cm、椭円形を呈する。出土遺物はない。

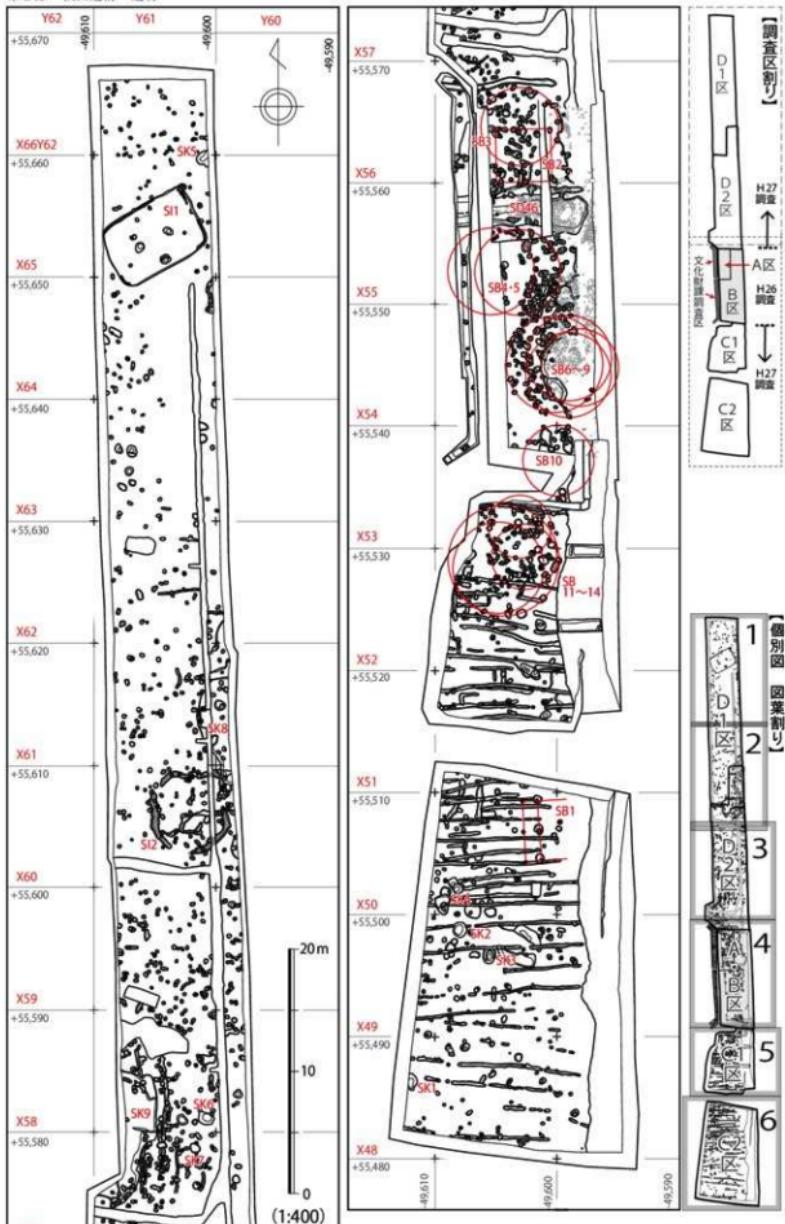
SK 4 (第5・11・20図) C 2区中程西側に位置する。長径 1.32 m、短辺 0.94 m、深さ 12cm、隅丸略長方形を呈する。土師器塊小片1点、内黒土師器塊小片2点が出土している。

SK 5 (第5・6・20・22図) D 1区北東隅で調査区東壁に接する。長径 1.18 m、短辺 1.08 m、深さ 15cm、不整形を呈する。第22図3・4の土器が出土している。3は弥生時代終末期の月影式の小型甕、4は同後期後葉の法仏式の甕である。

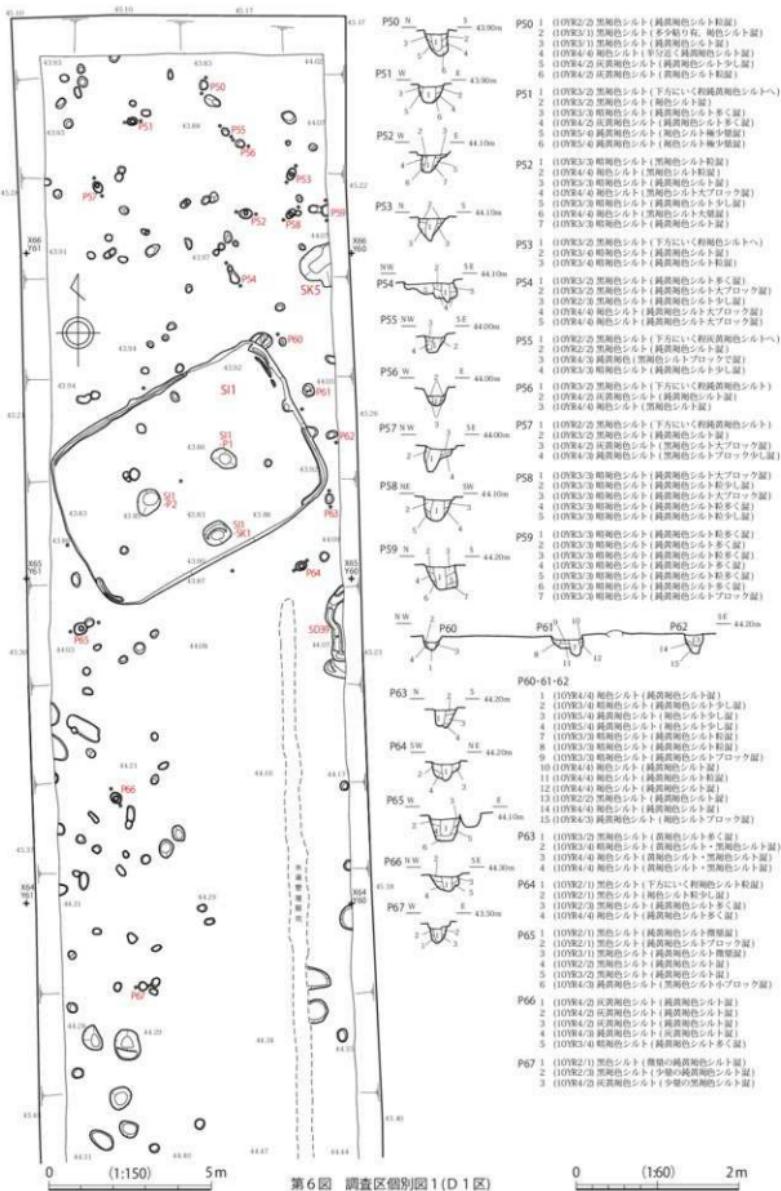
SK 6 (第5・8・20図) D 2区南側に位置する。長辺 1.29 m、短辺 0.92 m、深さ 40cm、隅丸略長方形を呈する。出土遺物はない。

SK 7 (第5・8・20・22図) D 2区南側に位置する。長径 0.79 m、短径 0.76 m、深さ 11cm、不整円形を呈する。第22図5の土器が出土している。正位の土器を縦割りした場合のちょうど片半部がほぼ完形で遺存していることから、土坑中には北西に口縁を向け(図版6右下写真参照、左が口縁部)横位に埋設してあり、いずれかの時期に上面となっていた右半部が削平されたものとみられる。土器が地中に埋まっていたとするなら、当時の地表から 30cmほど削平されていることになる。口径 37.0cm、

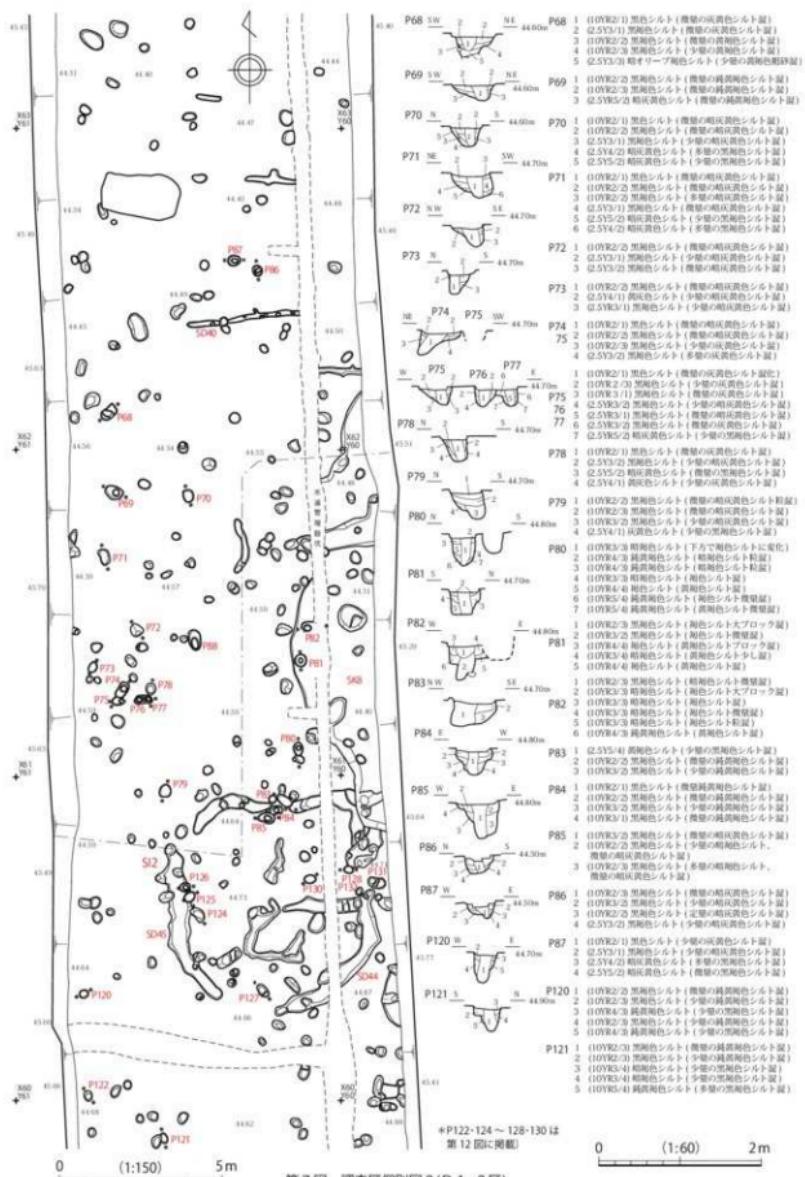
第2節 檢出遺構・遺物



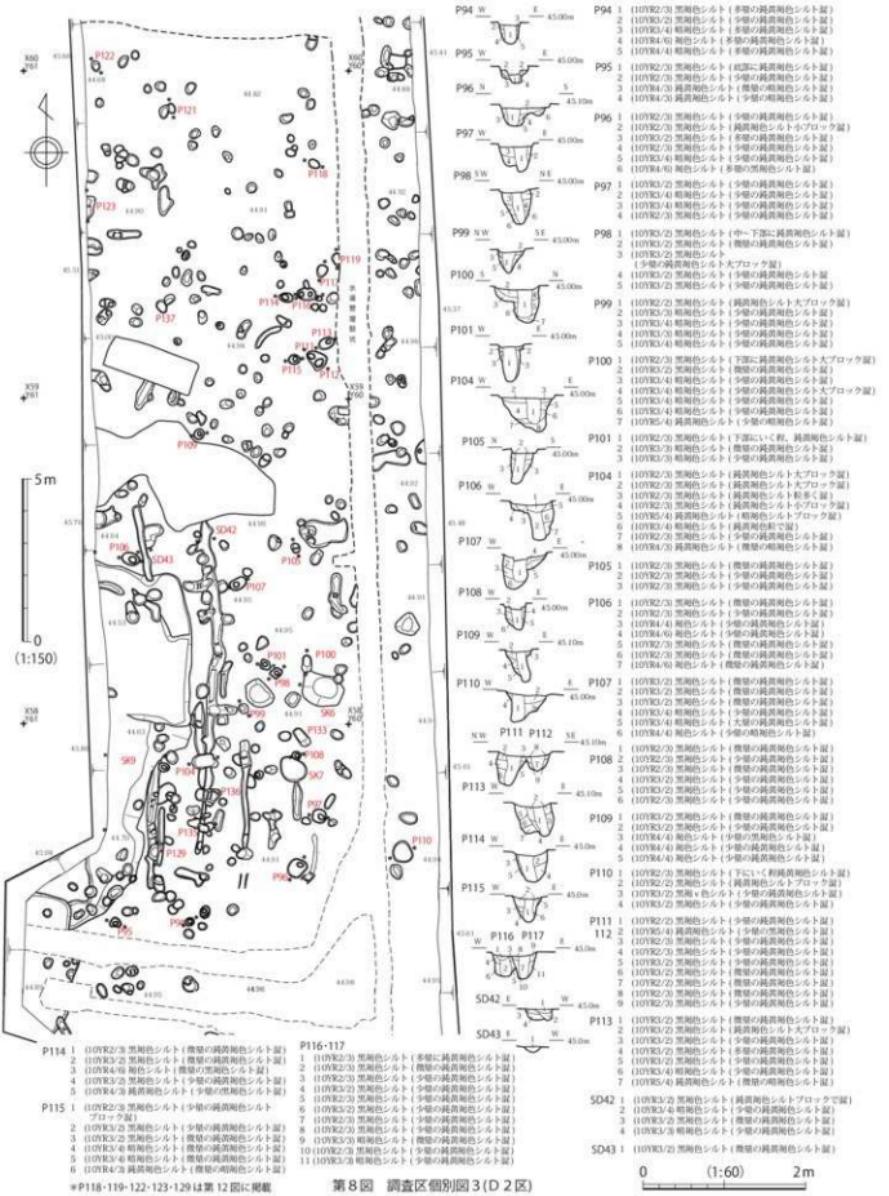
第5図 調査区全体図



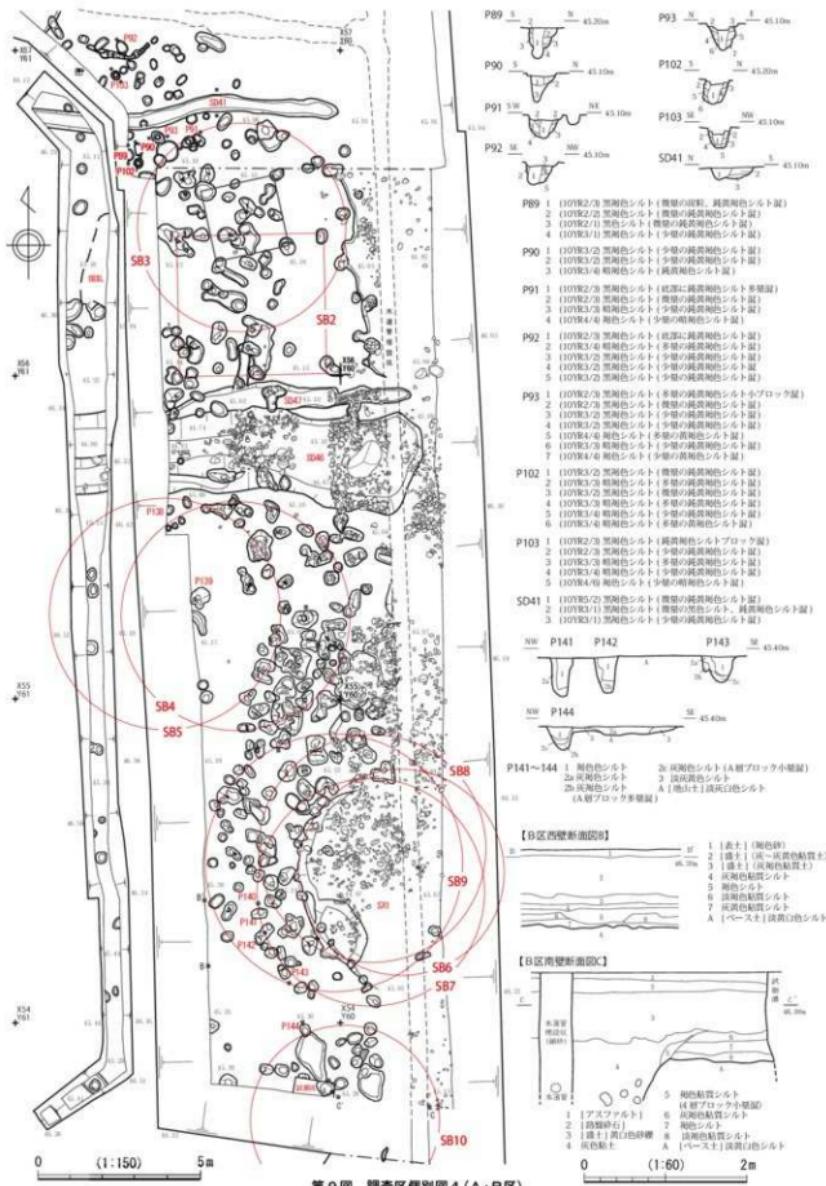
第6図 調査区個別図1(D1区)



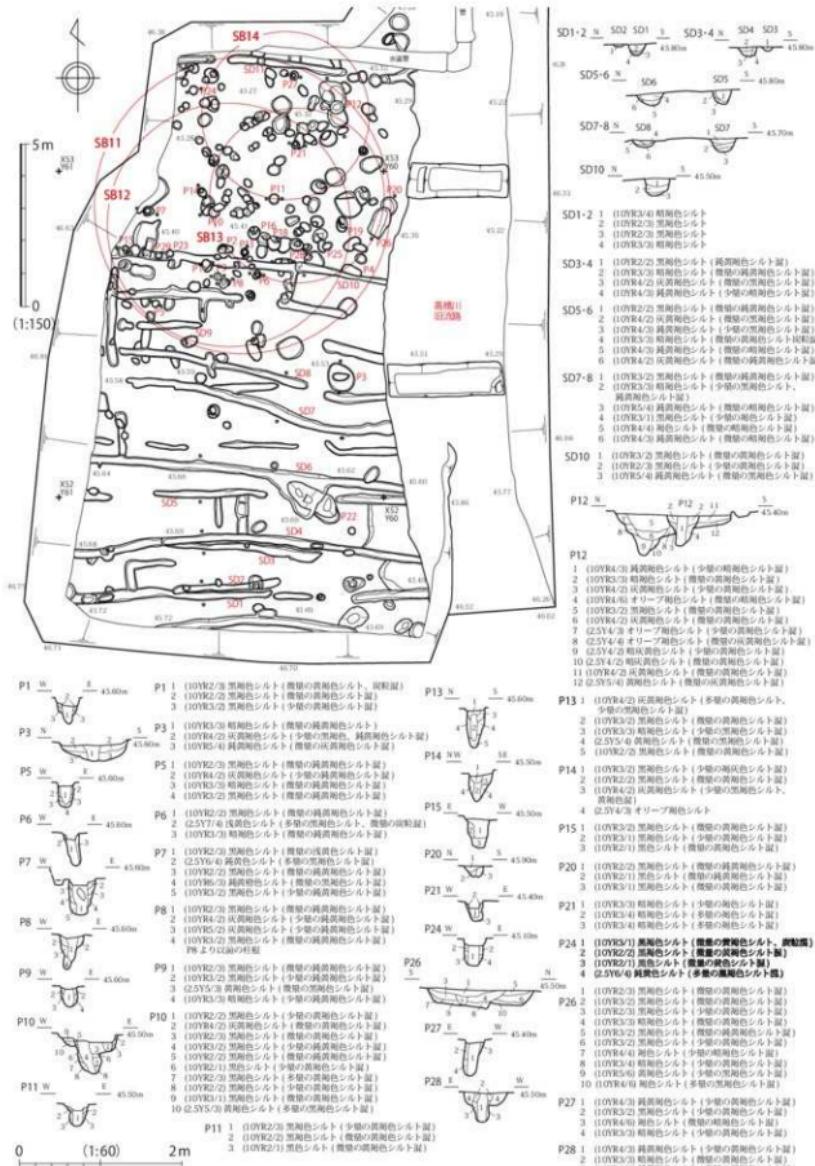
第7図 調査区個別図2(D1・2区)



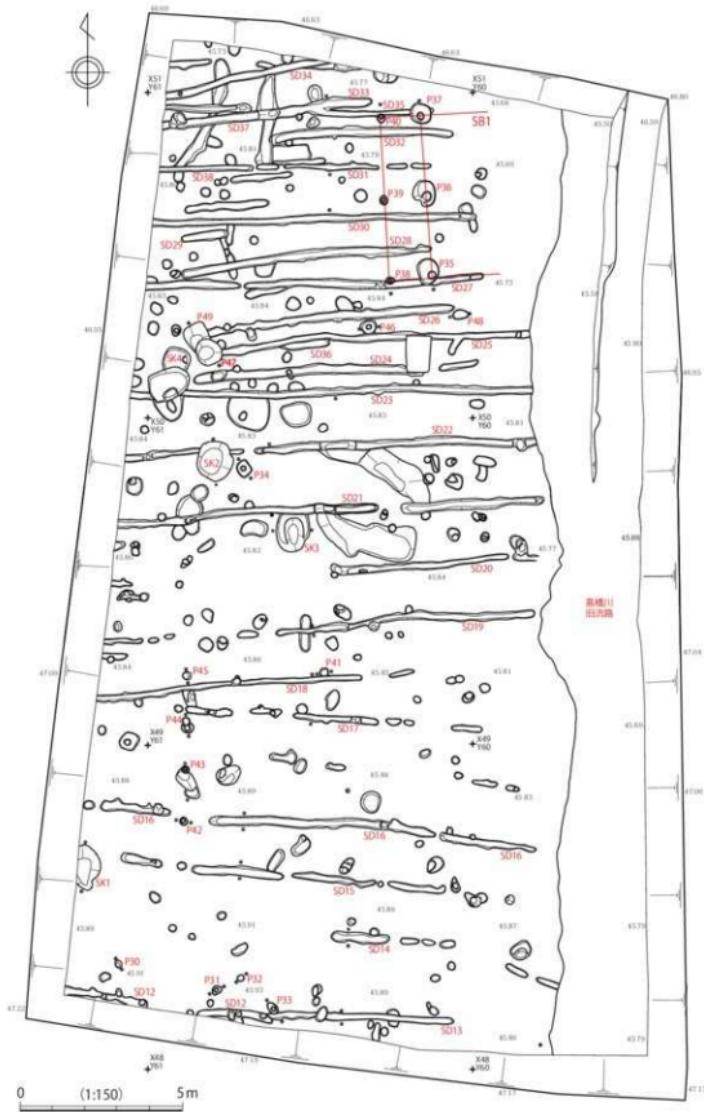
第8図 調査区個別図3(D 2区)



第9図 調査区個別図4(A・B区)

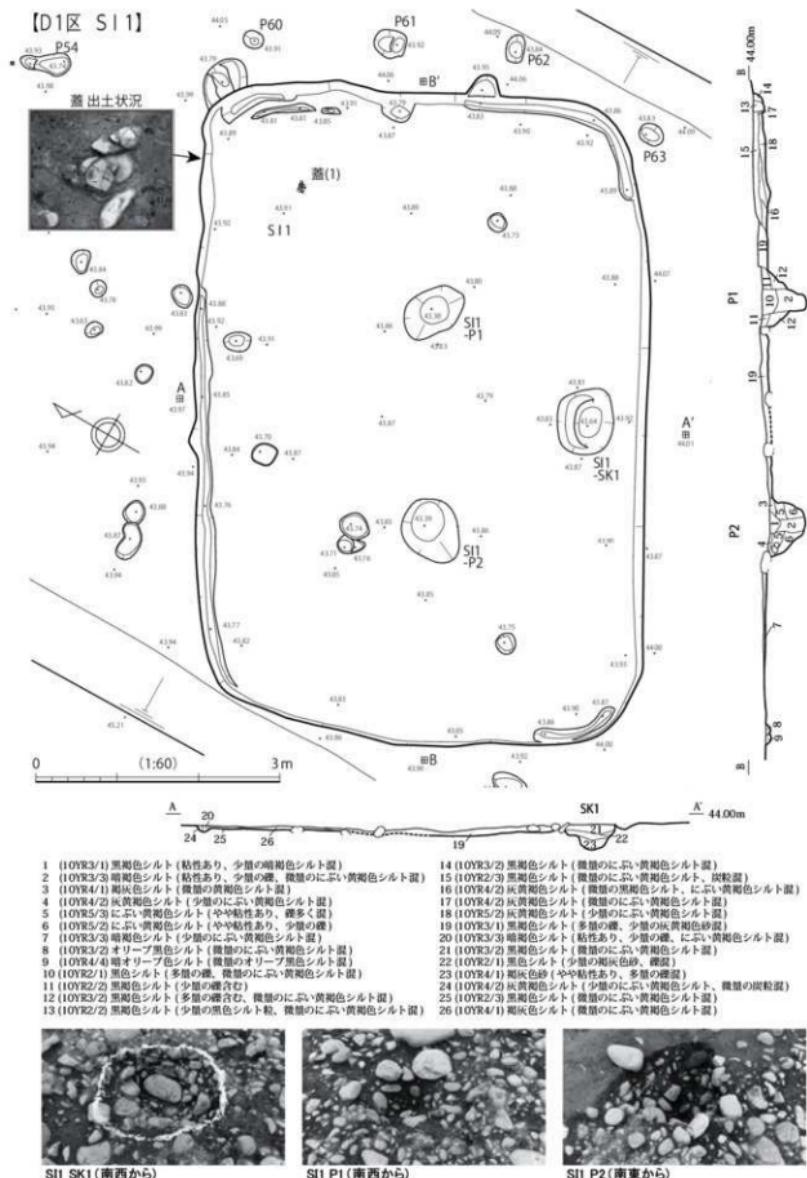


第10図 調査区個別図5(C 1区)

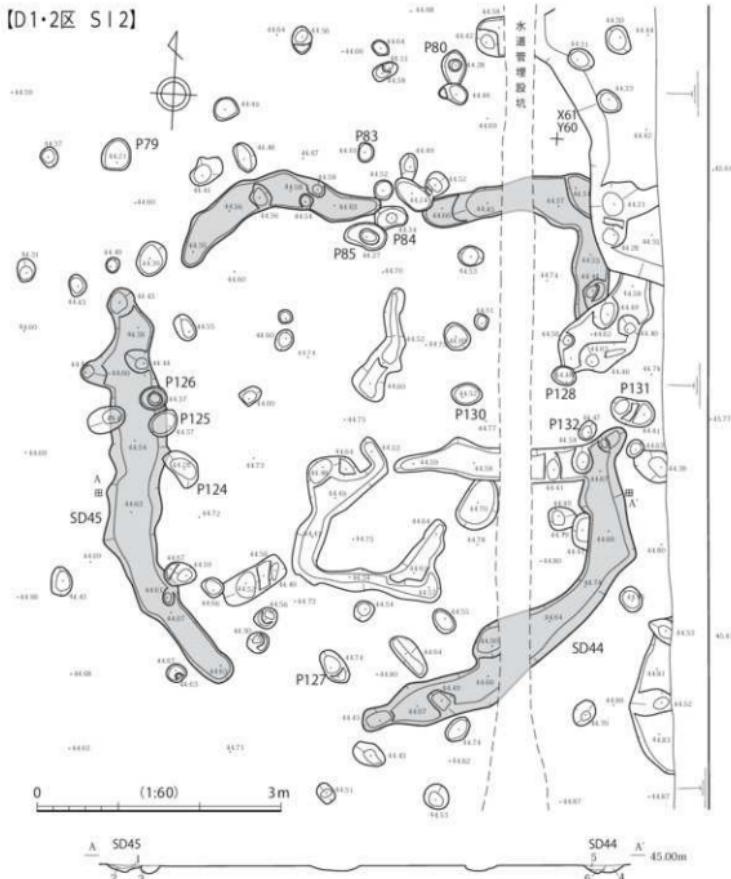


第11図 調査区個別図 6(C 2区)

第2節 検出遺構・遺物

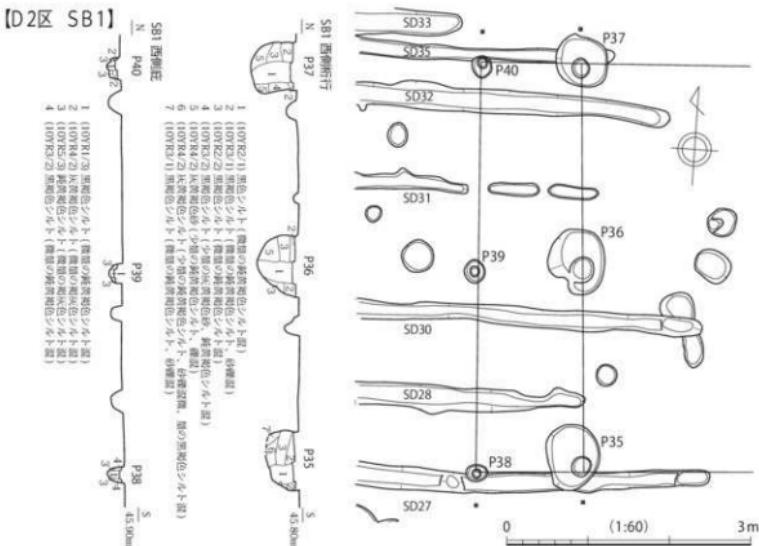


第13図 遺構図1(S11)



第14図 遺構図(512)

器高 44.1cm、底径 8.8cm。繩文時代後期中葉前半「馬替式」(高 2001)の波状口縁深鉢である。口縁は大波頂3個、小波頂3個を持ち、頸部は外反、張り出した胴部から底部にかけては強くすぼまる。口縁は内側につまみ出す。大波頂には頂部が片側によった偏向突起をつけ、その外面に1個、側面に2個の円形凹みを加える。小波頂はつまみ出しにより造り出す。大波頂下には棒状具による短沈線を縦位に3列、小波頂下には2列加える。口縁に沿っては横位沈線を、上位から3・2・3本1単位でめぐらす。3を1単位とする波頂や沈線、口縁部の造作、文様は本遺跡北方2.5kmに位置する金沢市馬替遺跡出土土器と良く共通するものである。本土坑は後期中葉前半の土器棺墓の可能性がある。



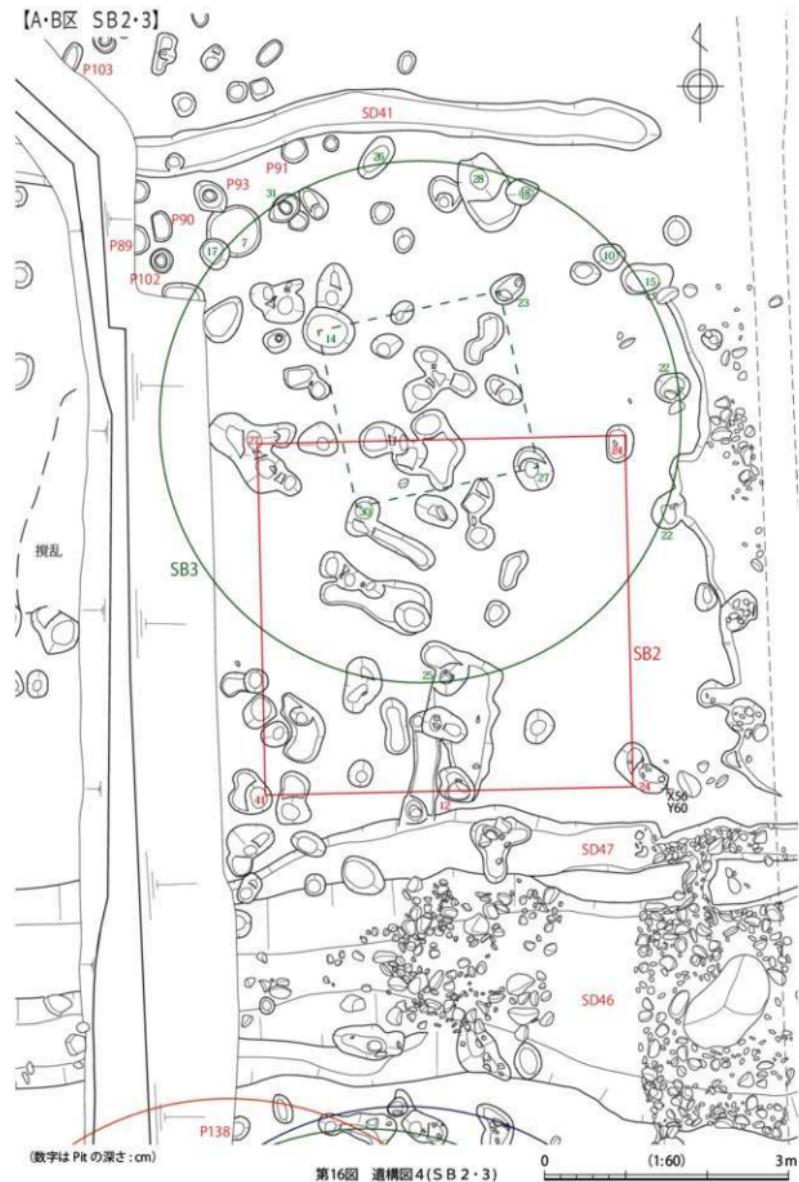
第15図 遺構図3(SB1)

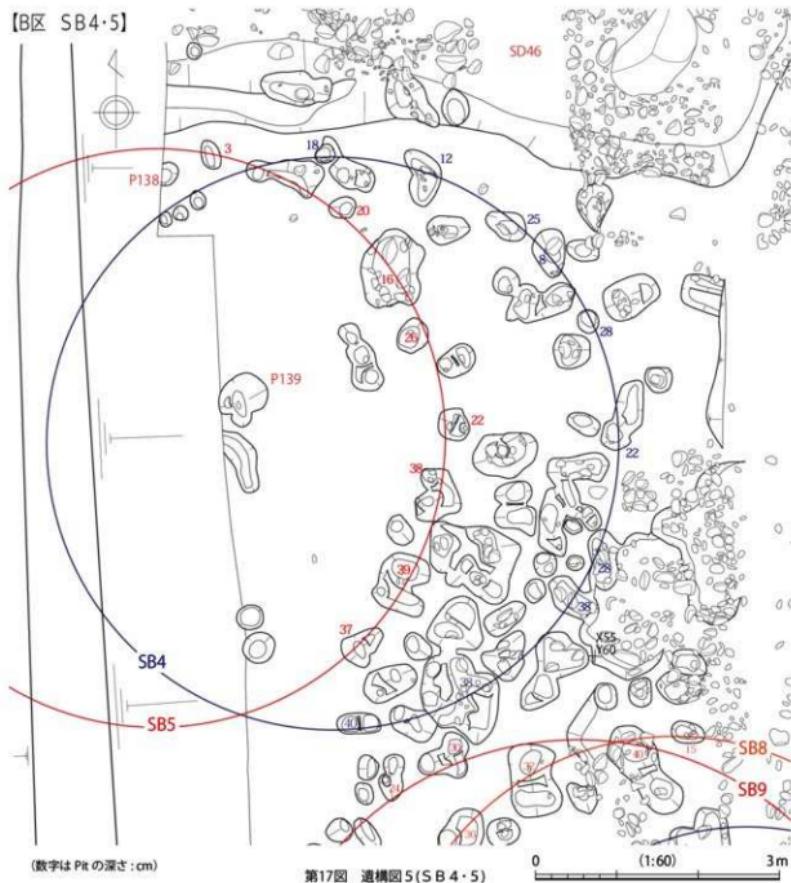
SK8 (第5・7図) D2区北東隅で調査区東壁に接する。長さ13.5m、幅2.5m、深さ20~30cmにわたる弧状の深い凹みである。縁から高橋川に向かって緩く下っており、高橋川旧流跡とみられ、土器片が1点出土している。

SK9 (第5・8図) D2区南西隅で調査区西壁に接する。長さ10m以上、幅1.7m以上、深さ52cmを測る。繩文土器細片が3点出土している。銳角に落ち込むことから人為の遺構と推定するが、その性格は不明。

4 溝

耕作溝 (第5・8・10~12・22図) 調査区南半部のD2区南端やC区では、幅約20~60cm、深さ20~30cmの並走する耕作溝群が検出された。方位と溝間隔の相違により①~⑤群に大別される。①~④群は直線的に延び、⑤群は曲線を描く。その中ではさらに最大3期の重複が認められた。C2区では、①-1群: SD 14~17 (方位N-96°-E、間隔1.4~1.6m)、②-1群: SD 18~23・25~27・30~31・35~38 (方位N-88°-E、間隔1.4~1.6m)、これに重複する②-2群: SD 24~26・28~32 (方位N-84°-E、間隔1.4~1.6m)と②-3群: SD 29~38 南側の溝・37、C1区では、①-1群に方位を同じくする①-2群: SD 3・6~10・11などと、これに重複する①-3群: SD 1・3・5 (方位N-90°-E、間隔1.6m)、⑤-1群: 東西方向を向くが弧状のSD1南側の溝、SD4、⑤-2群: 蛇行するSD7・8。D2区では軸を90°変え南北方向に延びており、④-1群: SD 42~43など (方位N-11°-W、間隔1.5m)、その南側で④-2群: (方位N-1°-E、間隔1.4m前後)と④-3群 (方位N-5°-E、間隔1.4m前後)が重複して存在する。

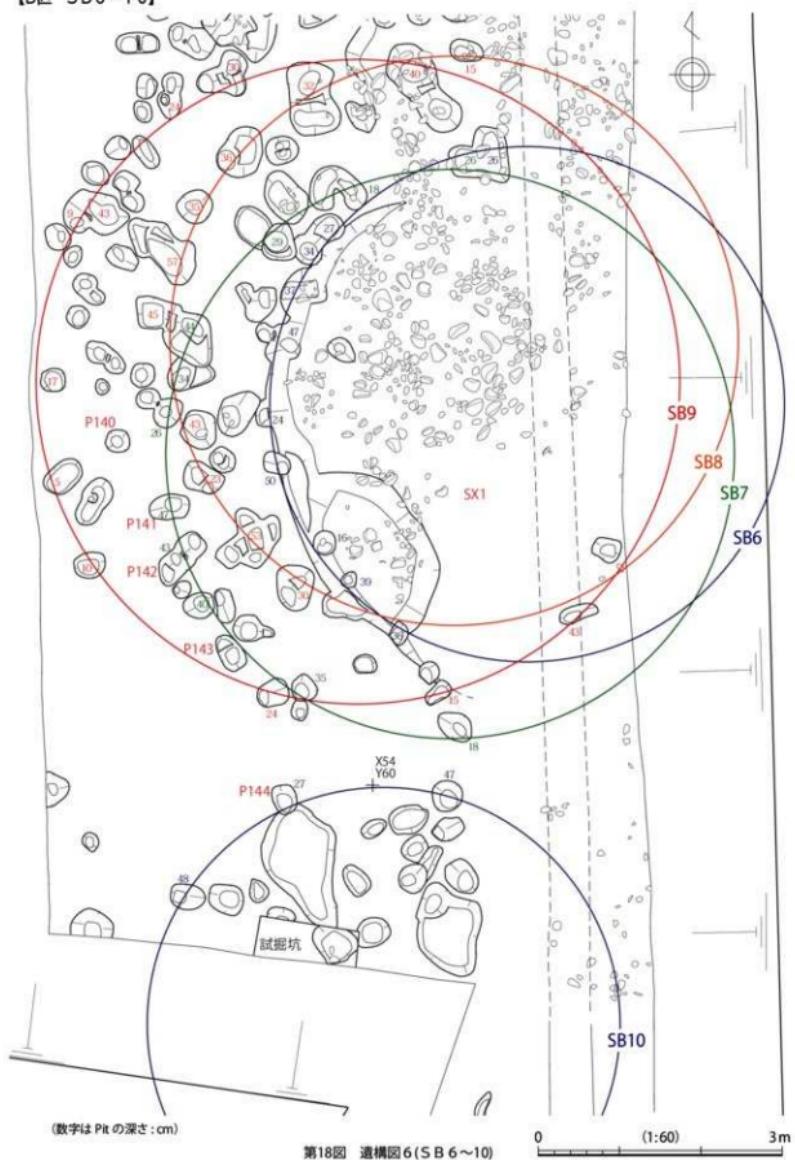




各耕作溝群の時期について、②-1群はSB1より古いことが切り合ひより示される。C2区SD19脇やSD33・34からは第22図8～10の打製石斧が出土するが混入品であろう。他にSD16・26・32・33・37からは土師器・内黒土師器壺、土師器・須恵器壺小片などが出土しており、おおむね古代VIないしⅦ期の所産とみられるものである。SB1が②群と方位をまったく同じくしていることからみて、これら耕作溝群はSB1と前後する、もしくは同時期の所産と推定したい。

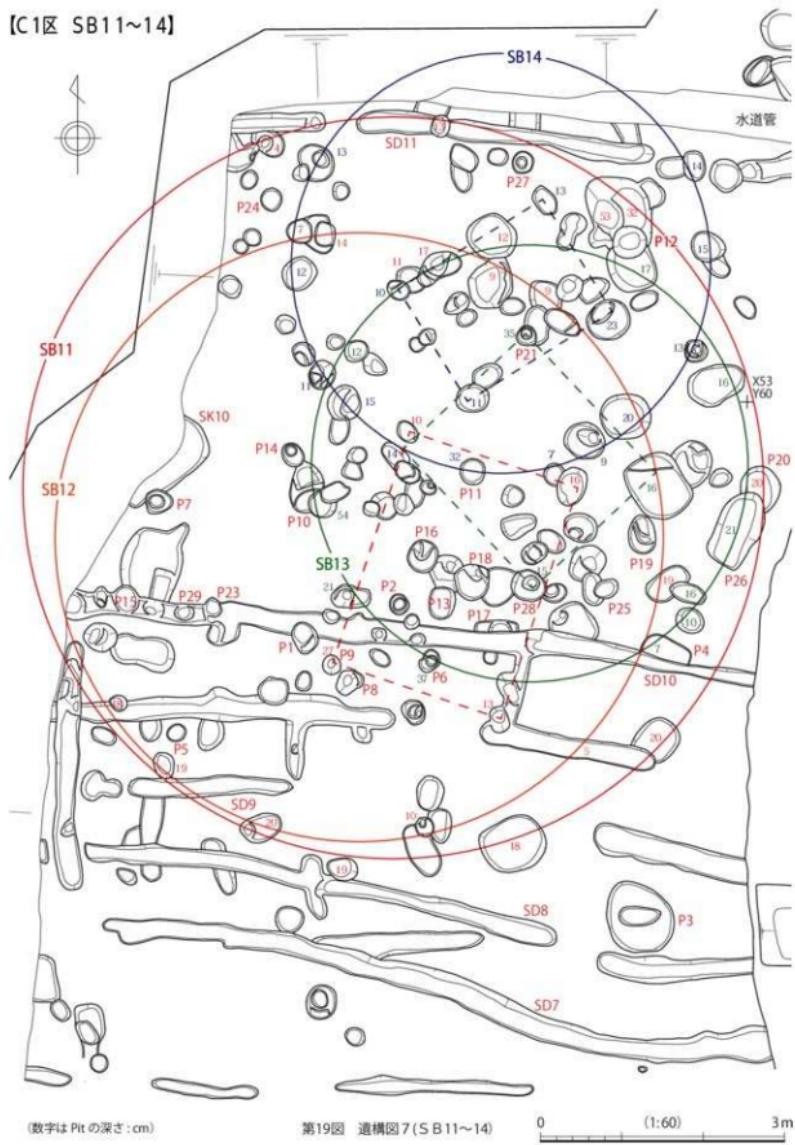
SD41（第5・9・16図）D2区南端に位置する。東西方向を向き（N-93°-E）、長さ9.8m以上、幅56cm、深さ19cm。性格不明だが、形状や、やや蛇行する点に南側8.3mに位置するSD47との類縁が指摘される。出土遺物はない。

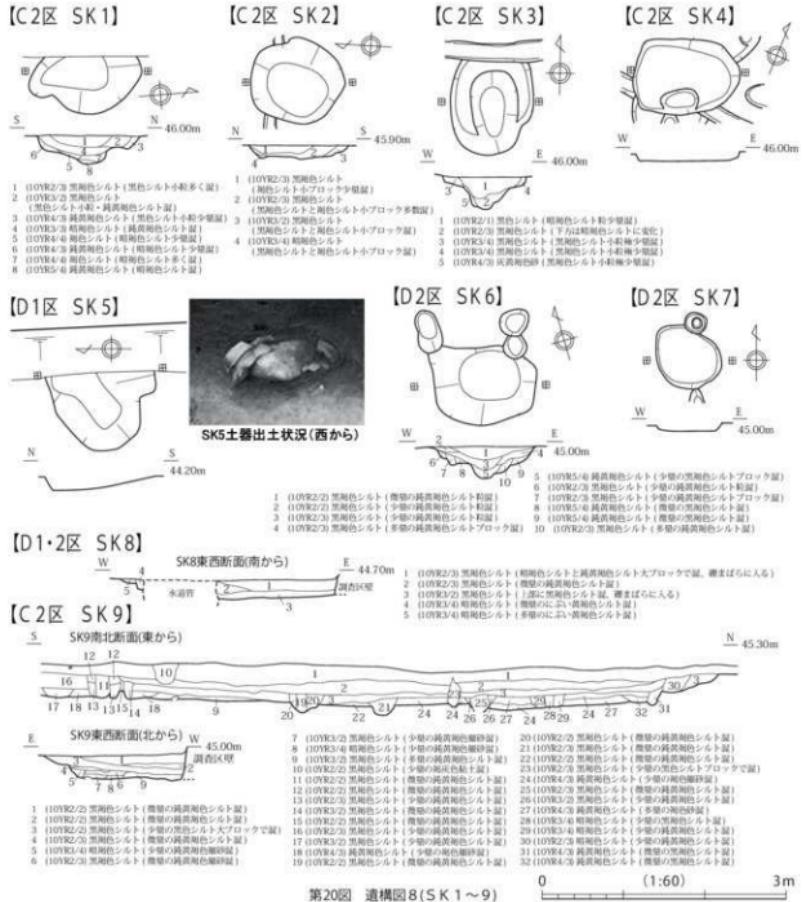
[B区 SB6~10]



第18図 遺構図6(SB6~10)

[C1区 SB11~14]

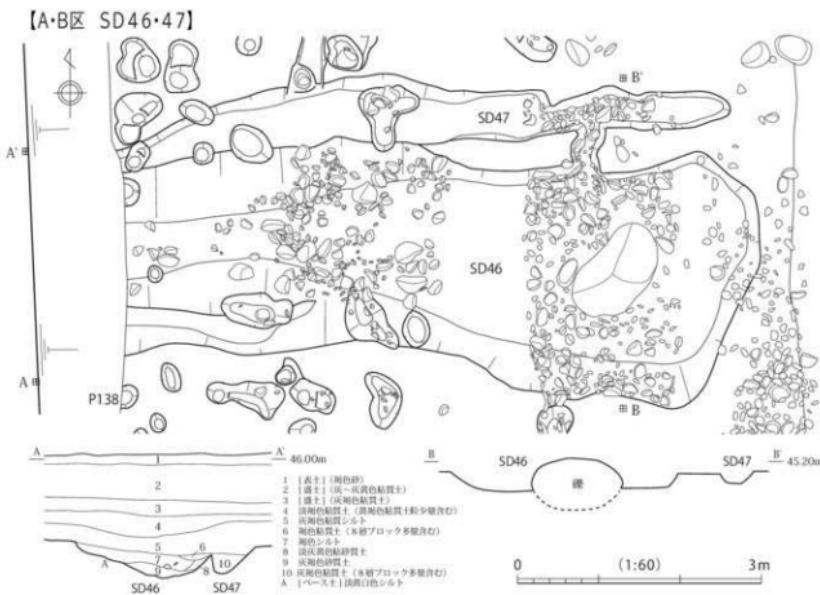




第20図 遺構図8(SK 1~9)

S D 46 (第5・9・21・23図) 東西方向を向き (N 89° ・E.)、B区北側、A区、文化財調査区を横断する。幅約2.4～2.8m、長さ11m以上、深さ44cm。東端が途切れていることからみて、何らかの区画溝の可能性がある。なお、この東端近くに長さ1.2m、高さ60cmの巨岩が溝中央に位置した。地山中に埋まりこんでおり、溝掘削前から存在し開口中もここにあったと推定される。出土遺物は第23図13～37に示した。土師器、須恵器は田嶋編年VI₃～VII₁期の所産である。これらは文化財調査区から巨岩周囲まで分布し、A区西端底ではまとまって出土した。

SD 47 (第5・9・16・21図) 東西方向を向き (N-89°E)、B区北側、A区、文化財課調査区を横断する。SD 46より古い。幅約85cm、長さ11m以上、深さ13cm。性格不明だが、形状や、やや蛇行する点に北側83mに位置するSD 41との類縁が指摘される。出土遺物はない。



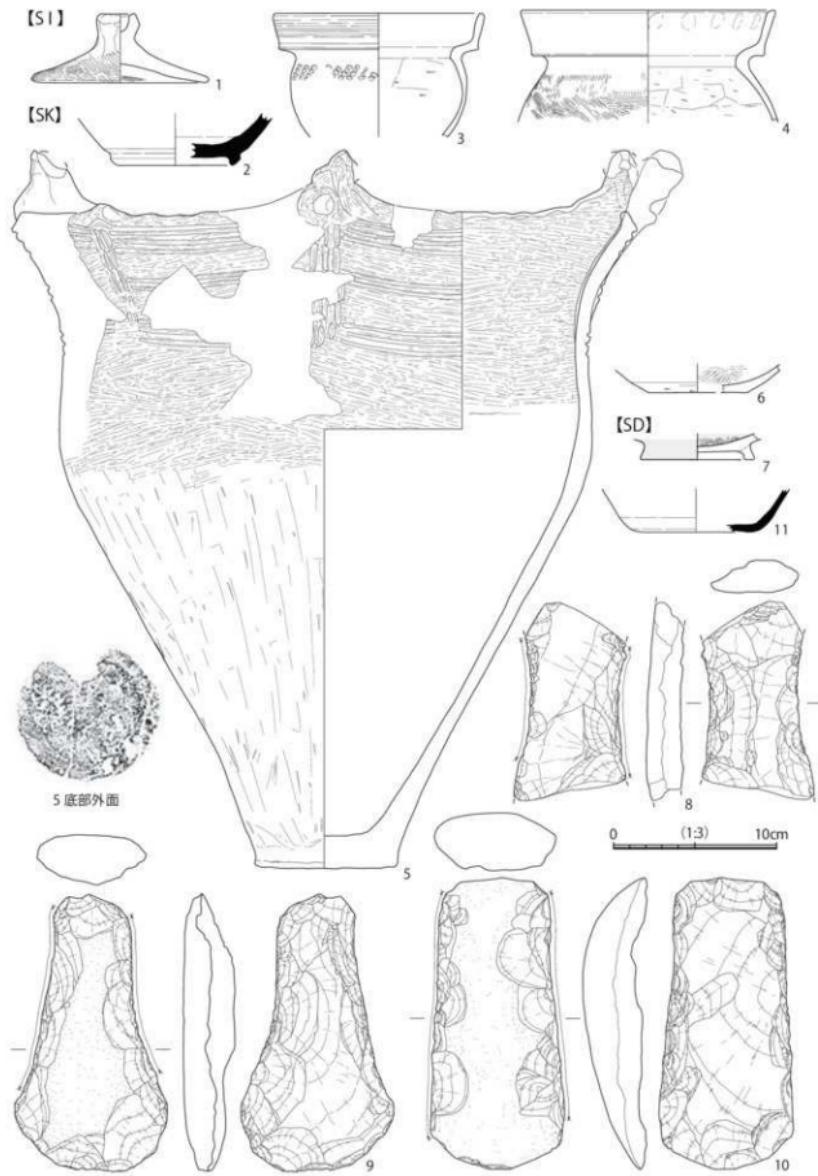
第21図 遺構図9(SD46-47)

5 その他の

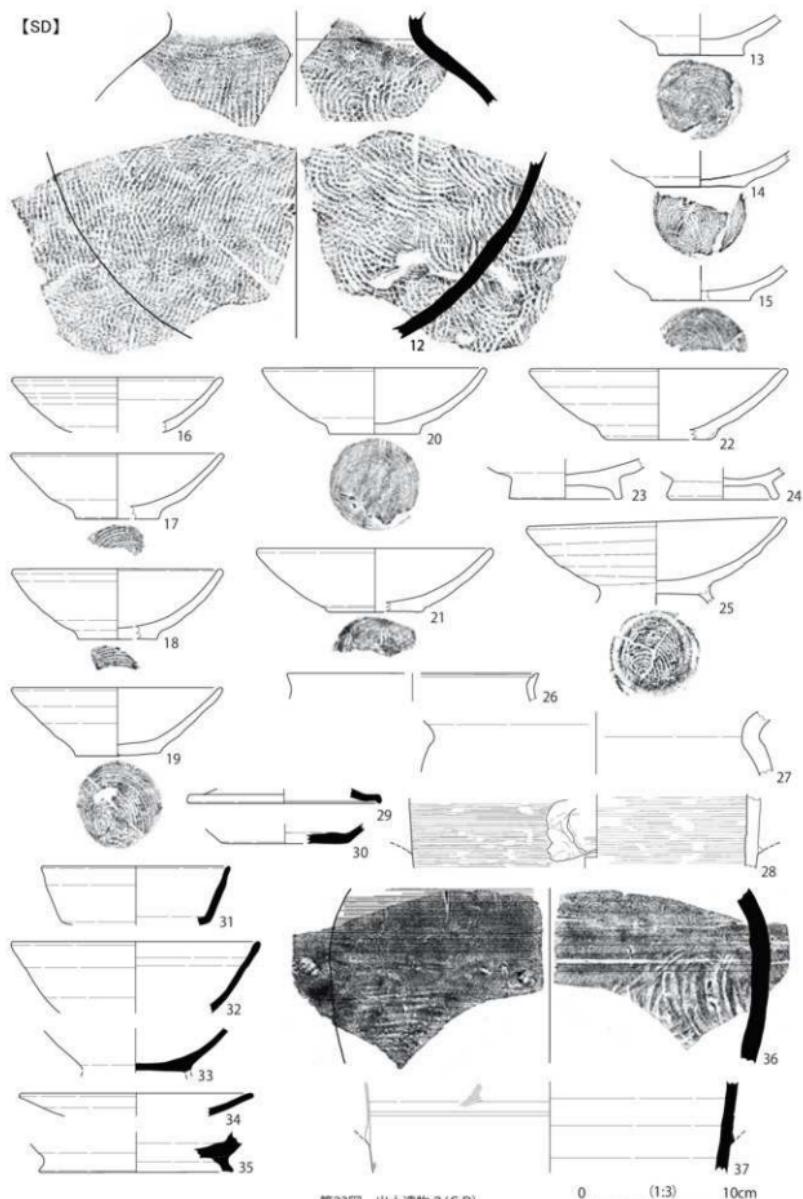
S X 1 (第5・9・18・24図)

B区南側に位置する。高橋川の旧流路に接する長さ5.2m、幅1.5m、深さ約20cmの半楕円形状の凹みである。当初、竪穴建物を予想したが、覆土はしまりの甘いシルト土であり、底面は凹凸をなし西側では地山上の円礫が露出しており、高橋川の旧流路跡と判断された。出土遺物は第24図38~51に示した。38は縄文土器浅鉢である。縦位の短沈線1個と横位に2条の沈線を加える。小片であるが、後期後葉八日市新保式の所産とみられる。39は条痕施文の縄文時代後・晚期の土器。40は打製石斧は撥型で曲がりが大きい。湾曲する自然面を活かし使用の便を図った製品かもしれない。41は短彎形で、40とともに先端部がよく摩耗している。須恵器坏45、47・48はV期の、内黒土師器塊42、土師器塊43・44、須恵器坏46は同VI期の所産である。ほか須恵器壺49、51、瓶50などがある。

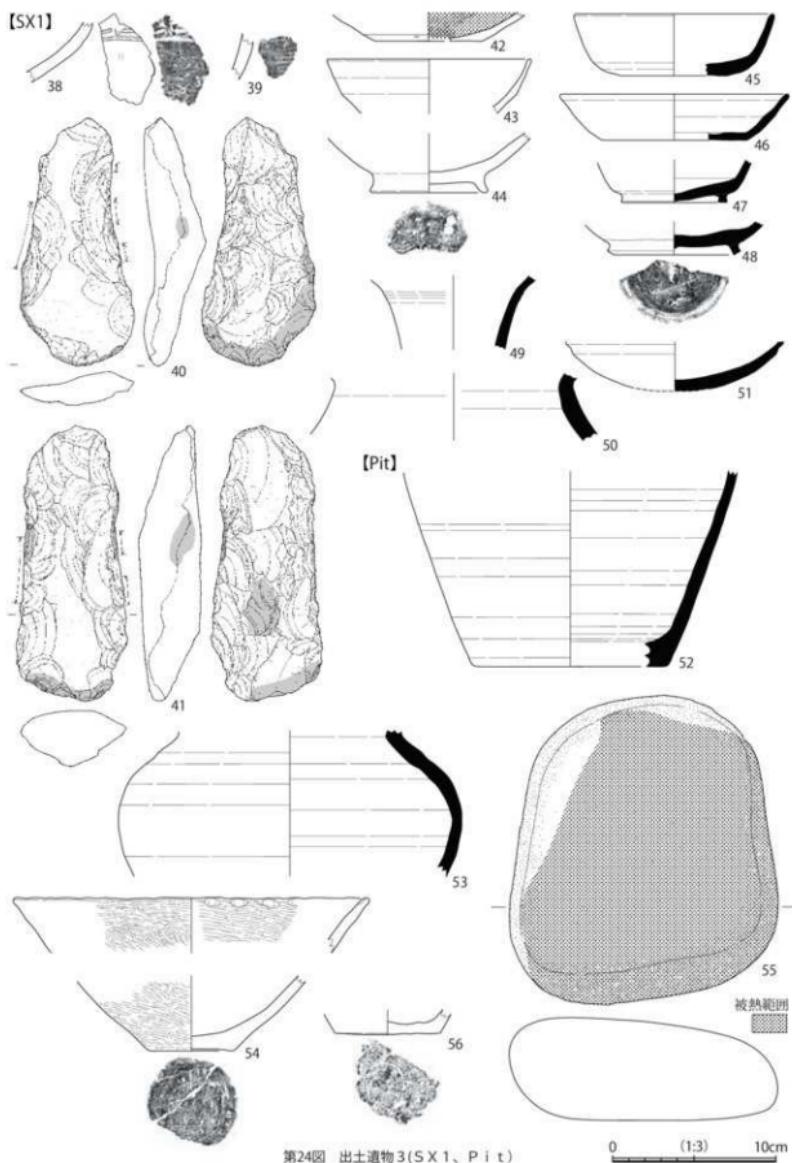
ピット（第24・25図） 全域に分布する大小のピットには平・断面において柱穴跡と観察されるものが多いが、抽出できた建物は少ない。断面図を作成したものを主に番号を付した小穴は144基を数え、そのうち25基から遺物が出土している。國化した10点の他は微細片で、C1区の古代の土師器片が多い。第24図54は縄文土器浅鉢で口径21.7cm。外面を磨き口唇部には指押さえを加える。縄文時代晚期後葉下野式の所産か。55の台石は被熟し表面にコゲ様のものが残る。小型磨製石斧59はA区SD46南縁に位置する小穴P138から出土したもので、基部が破損する。61は底径5.2cm、凹み底をなし縄文時代後期の鉢あるいは注口土器底部とみられる。



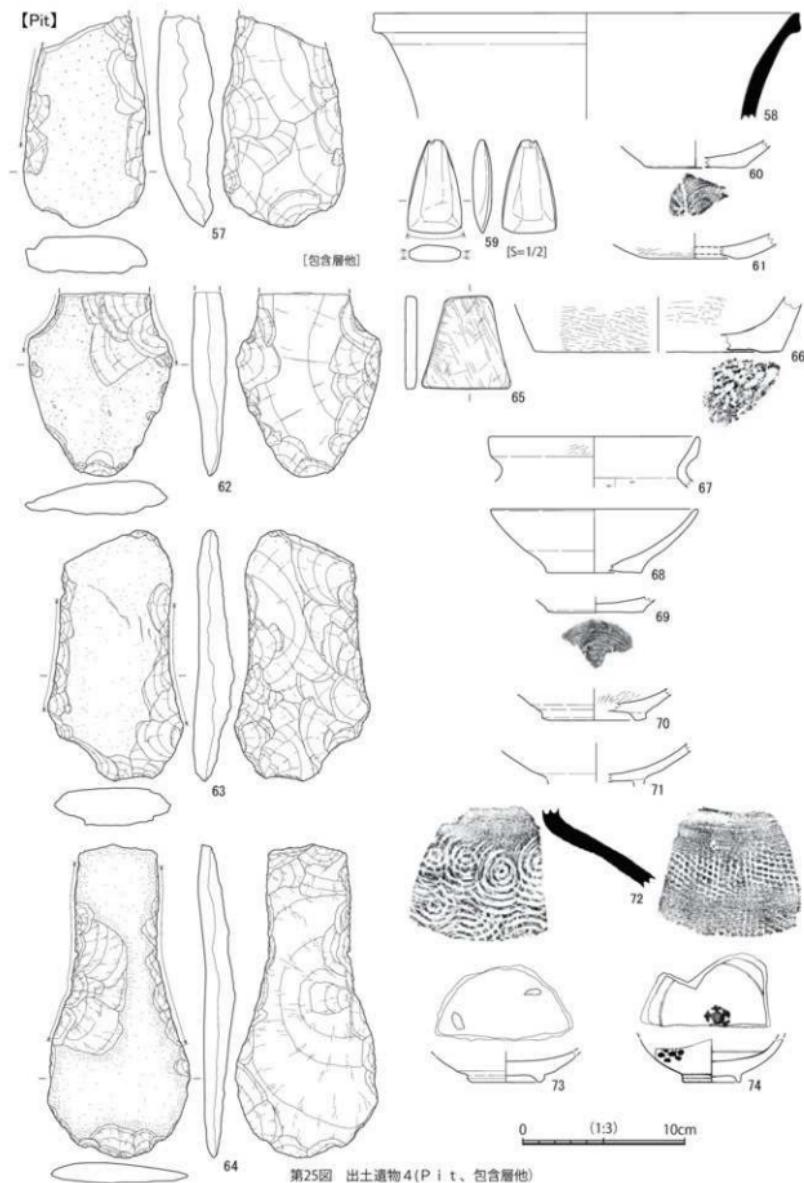
第22図 出土遺物 1(S I, S K)



第23図 出土遺物2(SD)



第24図 出土遺物3(SX1、Pit)



第25図 出土遺物4(Pit、包含層他)

番号	調査年	出土場所	遺構	遺物種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	基底(cm)	調整(内)	調整(外)	備考	基盤 番号	
1	2 D1K	S11 北東面 No.1	弥生土器	瓶	-	10.5	-	4.2	ナデ	ナデ, ハケメ ケズリ, ロコナデ, ハラ切り後ナデ	C1		
2	2 C1K	S02	須恵器	瓶	-	8.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	D61		
3	2 D1K	S03 窓壁下	弥生土器	甕	-	12.8	-	-	ヨコナデ, ナデ, ケズリ	横断面 5 条, ナデ, 道統斜窓	C1		
4	2 D1K	S03 窓壁下	弥生土器	甕	-	15.5	-	-	ヨコナデ, ナデ, ケズリ, 指痕直窓	ヨコナデ, ハラ後横ナデ, ハク	C1		
5	2 D2K	S07 頂部側面	縄文土器	深鉢	-	38.0	8.8	44.1	ナデ, ミガキ	沈殿文, ナデ, ミガキ, 板ナデ	外画スス付着		
6	2 D2K	S09	土師器	無台盤	-	6.0	-	-	ミガキ	ナデ, ケズリ	D65		
7	2 C1K	S04 西端付近	土師器	有台盤	-	7.0	-	-	ミガキ	ミガキ	D47		
8	2 C1K	S05 19号北 4号北	石製品	打製石斧	残存長	12.2	6.9	厚2.3	-	ヨコナデ, ナデ, ケズリ	12.5m, 鋸灰, 刃器・ 基盤等に付着	E9	
9	2 C1K	S06	石製品	打製石斧	長17.1	40.0	9.4	厚2.2	-	-	17.6, ダイヤモンド	D610	
10	2 C1K	S04	石製品	打製石斧	長18.0	幅8.3	厚3.9	-	-	65.4m, 鋸灰, 斧断面 反り大きい, 勾方向に本 柄付けに不可能性あり	E78		
11	2 C1K	S12 SD26	須恵器	無台盤	-	8.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ, ハラ切り後ナデ	D43		
12	2 D2K	S01 19号北 19号北	須恵器	甕	-	-	-	-	ロクロナデ, ナデ	ロクロナデ, タキ	D64		
13	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	瓶	5.1	(2.6)	4.6	3.5	ヨコナデ, ナデ, 直切り	ヨコナデ, ナデ, ヨコナデ	D27		
14	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	瓶	5.2	(2.3)	4.6	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	D35		
15	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	瓶	5.8	(2.0)	4.2	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	D25		
16	1 B1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	12.6	-	(3.5)	ヨコナデ	ヨコナデ, ハク	ヨコナデ, ハク	D37		
17	1 B1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	12.8	4.9	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ, 直切り	D22			
18	1 B1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	12.8	4.9	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ, 直切り	D29			
19	1 B1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	12.8	4.9	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ, 直切り	D28			
20	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	13.4	5.4	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	D28			
21	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	14.2	5.8	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	内外面磨削	D33		
22	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	無台盤	15.6	6.2	4.4	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	内外面磨削	D23		
23	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	有台盤	-	6.0	(2.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	D31		
24	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	有台盤	-	6.2	(2.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	D24		
25	1 B1K	SD46 (SD1)	土師器	有台盤	-	15.7	-	(5.3)	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	D21		
26	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	甕	(15.4)	-	(1.8)	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	内面黄色, 横縫合, 直 切上面上に横縫合 1 条添ら ず	D34		
27	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	甕	-	-	(4.0)	ヨコナデ, ナデ	ヨコナデ, ナデ	ヨコナデ, ナデ	D30		
28	1 A1K	SD46 (SD1)	土師器	甕	-	-	(5.0)	ミガキ	カキメ	D32			
29	1 A1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	11.8	-	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	直み有	D26		
30	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	-	8.0	(1.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	内面自然輪	D38		
31	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	11.4	9.0	(0.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	外画一層削	D13		
32	1 A1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	15.0	-	(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	外画自然輪	D33		
33	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	-	-	(2.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	D5		
34	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	-	14.2	-	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	内面縦縫合重ね縫合直 有、外面自然輪	D14	
35	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	-	11.8	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	D4		
36	1 A1K	SD46 (SD1)	須恵器	甕	-	-	(10.7)	ヨコナデ	カキメ, 当て具組	カキメ, タキ	D1		
37	1 B1K	SD46 (SD1)	須恵器	双耳甕	-	-	(5.6)	ヨコナデ	ヨコナデ, ハラ, ハラナリ, ナデ	外画自然輪	D15		
38	1 B1K	SK1	縄文土器	浅鉢	-	-	(3.5)	横方向ミガキ	ヘラ工具による文様、 横方向ミガキ	八日市新保式	D99		
39	1 B1K	SK1	縄文土器	浅鉢	-	-	(2.7)	ナデ	ナデ	-	D49		
40	1 B1K	SK1	石製品	打製石斧	長15.4	幅7.0	厚2.9	-	-	295.6g, 先端埋磨誠 歯突起	E72		
41	1 B1K	SK1	石製品	打製石斧	長17.0	幅6.6	厚2.9	-	-	485.0g, 先端埋磨誠 歯突起	E71		
42	1 B1K	SK1	土師器	無台盤	-	6.6	(1.8)	ヘラミガキ	ロクロナデ, ロクロケズリ	内面黒色	D29		
43	1 B1K	SK1	土師器	無台盤	12.9	-	(3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	D18			
44	1 B1K	SK1	土師器	有台盤	-	7.2	(3.7)	横方向不規則不 整	ヨコナデ	内外面磨削	D19		
45	1 B1K	SK1	須恵器	無台盤	12.2	9.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ, ハラ切り後ナデ	口縫合重ね縫合直有 内面自然輪	D9		
46	1 B1K	SK1	須恵器	無台盤	14.0	9.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ, ハラ切りナデ	口縫合重ね縫合直有 内面自然輪	D65		
47	1 B1K	SK1	須恵器	無台盤	14.0	9.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ, ハラ切り後ナデ	口縫合重ね縫合直有 内面自然輪	D66		
48	1 B1K	SK1	須恵器	有台盤	-	8.2	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ, ハラ切り	ロクロナデ, ハラナリ 内面自然輪	D8		
49	1 B1K	SK1	須恵器	有台盤	-	8.2	(4.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	直縫合	D36		
50	1 B1K	SK1	須恵器	有台盤	-	-	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	D11		
51	1 B1K	SK1	須恵器	有台盤	-	-	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	D7		
52	2 C1K	P2	須恵器	甕	-	12.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ, ナデ	-	D44		
53	2 C1K	P2	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	D45		
54	2 C1K	P4 / 下層 / 西側 南側	縄文土器	浅鉢	21.7	5.4	-	ミガキ	ミガキ	底面ダレ状底碗あり	C5		
55	2 C1K	P7	石製品	右石	幅19.0	幅16.6	厚3.3	-	-	3,000g, 鞍灰岩	E112		
56	2 C1K	P10	土師器	甕・壺	-	6.5	-	ロクロナデ	羅・直	-	D46		
57	2 C1K	P20	石製品	打製石斧	残存長	13.0	幅7.6	厚3.4	-	408.9g, 鞍灰岩	E111		
58	2 C1K	P49	須恵器	甕	-	26.1	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	D42		
59	1 A1K	P138 (P1)	石製品	打製石斧	長3.9	幅2.2	厚0.8	-	5.6	(1.7) ヨコナデ	9.4kg, 先端埋磨誠 蛇紋岩	G3	
60	1 B1K	P139 (次 P2)	土師器	無台盤	-	-	5.6	(1.7)	ヨコナデ	ヨコナデ, 直切り	内面直切	D17	
61	1 B1K	P140 (次 P3)	縄文土器	注口土器	-	5.2	(1.6)	摩耗の為調節不 整	ミガキ, 指痕直窓	内面磨耗	D16		
62	2 D1K	測量区壁中	石製品	打製石斧	残存長	11.3	幅8.9	厚2.1	ミガキ	ミガキ	211.4g, 鞍灰岩	E73	
63	2 D1K	X11960	石製品	打製石斧	長15.5	幅8.4	厚2.6	-	-	319.5g, 鞍灰岩	E77		
64	2 C1K	A2/32/「負荷量」	石製品	打製石斧	長19.3	幅8.7	厚1.9	-	-	307.0g, 宝山砂	E76		
65	2 C1K	表土砂	石製品	右石	幅8.5	幅6.5	厚0.7	-	-	42.3g, 黒色頁岩	E64		
66	2 C1K	中央	縄文土器	深鉢	-	15.0	-	ミガキ	ミガキ	-	D66		
67	2 D1K	測量区壁中	弥生土器	甕	12.8	-	-	横方向の為調節不 整	ケズリ, 摩耗の為調節不 整	-	C4		
68	2 C1K	表土砂	土師器	無台盤	12.7	5.3	3.9	横方向の為調節不 整	ヨコナデ, ハラナリ	-	D48		
69	2 C1K	表土砂	土師器	有台盤	-	6.0	-	ヨコナデ, ハラナリ	ヨコナデ, ハラナリ	-	D49		
70	2 D1K	測量区壁中	土師器	有台盤	-	6.4	-	ミガキ	ミガキ, ロクロナデ	-	D53		
71	2 C1K	表土砂	土師器	有台盤	-	6.0	-	摩耗	摩耗	-	D50		
72	1 B1K	「負荷量」	土師器	甕	-	-	(4.9)	ヨコナデ, 当て具組	ヨコナデ, カキメ後タタキ	ヨコナデ, カキメ後タタキ	D12		
73	2 C1K	田河川左岸付	脚器	甕	-	4.7	-	-	-	16世紀末~17世紀初, 財 主トヨアリ	D61		
74	2 C1K	田河川左岸付	脚器	甕	-	3.6	-	-	-	18世紀末~19世紀初, 財 主トヨアリ	D62		

第3表 出土遺物観察表

その他遺物 第25図62～64の打製石斧は、調査区内で散発的に出土した。いずれも撥型で、62は半折し、63はやや幅広のもので基・刃部を欠く。64は基部が細身のものである。65は砥石とみられる。古代以降の所産か。67は弥生時代後期中葉のもの、土器師塊68・69はVI3～VII1期のもの。73は16世紀末～17世紀初めの肥前系胎土目皿である。74は18世紀前半の肥前系染付碗である。73・74はC1区で高橋川旧河道跡に設けた試掘トレンチ出土であり、旧河道の時期の一端を示す資料である。

第3節 まとめ

河川改修工事にともなう発掘調査であり、河川左岸の幅11～16m、長さ190m、等高線に直行する南北に細長い調査区である。区画整理により削平を被り伴出遺物も乏しいことから、時期やその性格を判断できないものが多いが、調査の結果、大きく3期の集落跡が確認され、それぞれ主体とする地点を変え分布する状況がうかがわれる。以下、時代毎の様相をまとめる（第5図参照）。

1期：縄文時代後・晚期 遺物は極少量で、調査区南部を主に後期中葉前半・後葉、同晚期後葉の土器や縄文時代後・晚期の条痕を持つ土器、打製石斧などが散発的に出土した。遺構は調査区中央部で後期中葉前半「馬替式」期の土器棺墓とみられるSK7を検出した。土坑底辺が遺存したのみであり、土器が埋設されていたとするなら周辺は30cmほど削平されていることとなる。調査区南部のA～C区では多数のピット群の中から方形建物1棟、円形建物12棟を想定復元した。時期は後期中葉～晚期であり、円形建物は最大で4棟が重複する。その他亀甲形等形状の建物も存在するとみるが復元し得なかった。円形も含め建物数はさらに増えると考える。

2期：弥生時代後期後葉 遺物は極少量で全域に散布。北部出土品に比較的遺存度の高いものが多い。弥生時代後期中葉の1点の他は後期後葉～終末期に属する。遺構は北端で弥生時代終末期の2本主柱を持つ大型堅穴建物S1I1を検出した。北部に位置するS1I2にもその頃の平地建物の可能性がある。

3期：平安時代前・中期 南部を主に田嶋編年V～VII期にかけての土器が出土した。細片が多いが、その中で、中央部に位置するSD46からはVI3～VII1期の土器がまとめて出土した。遺構は南部に分布しており、SB1、区画溝とみられるSD1、南部全般に分布する耕作溝などがある。SD1のはかは時期を決定づける遺物は少ないが、いずれも東西方向に軸を置いておりSD1と同時期のものが多いと推定する。耕作溝は方位と溝間隔の相違より大きく5群を把握し、最大で3回の作り替えが認められた。SB1と軸方位が全く同じであることから、平安時代中期前半において居住地に接し島が設けられた風景をうかがわせるものである。

〔参考文献〕

- 小坂 大はか 2015『白山市曾谷遺跡・熱野遺跡』石川県白山市教育委員会
- 高畠勝喜はか 1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
- 田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンボジウム古代北陸の土器研究の現状と課題』報告書 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 2013『平安期土器の曆年代と横江莊遺跡の編年』『加賀 横江莊遺跡』白山市・白山市教育委員会
- 布尻和史 2003『御経塚遺跡における建物跡の検討－北陸縄文晚期集落理解への基礎作業』『御経塚遺跡Ⅲ』野々市町教育委員会
- 野々市町史編纂専門委員会 2005『図説 野々市町の歴史』石川県野々市町
- 野々市町史編纂専門委員会 2006『野々市町史』通史編 石川県野々市町
- 南 久和 2001『23.馬替式の設定提唱』『編年・その方法と実際』南書会
- 南 久和 2006『馬替遺跡』金沢市文化財紀要 107 金沢市教育委員会
- 山本直人 2006『御経塚遺跡と地城社会』『野々市町史』通史編 石川県野々市町
- 山本直人 2012『建物からみた手取川畠状地の縄文後晚期社会』『名古屋大学文学部研究集』173 名古屋大学文学部
- 横山貴弘 1998『上新庄ニシウラ遺跡』野々市町教育委員会
- 横山貴広 2000『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラグ遺跡・下新庄タナカダ遺跡』野々市町教育委員会
- 吉田淳 1989『御経塚遺跡II』野々市町教育委員会
- 吉田淳はか 2003『御経塚遺跡III』野々市町教育委員会
- 吉田淳 2009『御経塚遺跡IV』野々市町教育委員会



調査地遠景（南から）



調査地遠景（北から）



D1 区完掘状况



D2 区完掘状况



A · B 区完掘状况



C1 · 2 区完掘状况



調査区全景(南から)



着手前の状況(北から)



A区完掘状況(南から)



B区完掘状況(南から)



C1区完掘状況(北東から)



C2区完掘状況(北東から)



D1区完掘状況(北から)



D2区完掘状況(北から)



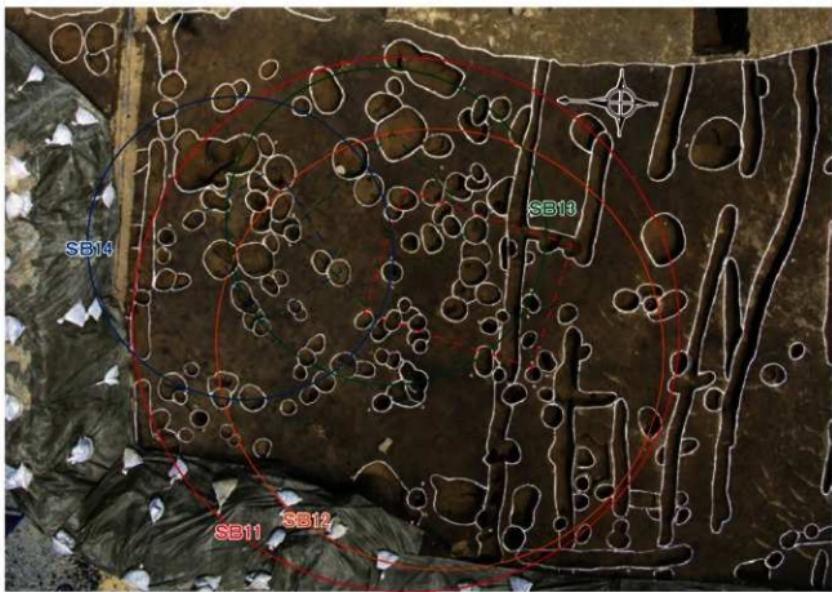
D1区 SII完掘状況(南東から)



D2区 SII完掘状況(俯瞰)



B区 SB4~10完掘状況(俯瞰)



C1区 SB11~14完掘状況(俯瞰)



C2区 SB1 P35土層断面(西から)



C2区 SB1 P38土層断面(西から)



C2区 SB1 P39土層断面(西から)



C1区 SB14 P11完掘状況(南から)



C1区 SB11 P6土層断面(西から)



C1区 SB13 P12土層断面(西から)



C1区 SB13 P26土層断面(南東から)



D2区 SK7土器出土状況(南西から)



C2区 SD15土層断面(西から)



C2区 SD16土層断面(西から)



A区 SD46西半部完掘状況(東から)



B区 SD46東半部完掘状況(東から)



B区 SB6→9、SX1周辺完掘状況(南から)



B区 調査区土層新面B(東から)



B区 調査区土層断面C(北から)



B区 発掘作業風景(南から)



報告書抄録

ふりがな	ののいちし しんじょうかきのきだいせき							
書名	野々市市 新庄カキノキダ遺跡							
副書名	二級河川高橋川 広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澤辺利明、岩瀬由美							
編集機関	公益財團法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477 FAX(076)229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財團法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんじょう 新庄 カキノキダ 遺跡	いしかわけん 石川県 いしかわぐん 石川郡 のいのいちし 野々市市 いしおとう 新庄1丁目 地内	17212	1207500	36度 29分 59秒	136度 36分 46秒	20140804 ～ 20140916	510m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新庄カキノキダ遺跡	集落跡	縄文時代、弥生時代、 平安時代		竪穴建物、方型・ 円形建物、土坑、溝		縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器		
要約	<p>河川改修工事にともなう発掘調査であり、河川左岸の幅11～16m、長さ190m、等高線に直行する南北に細長い調査区である。調査の結果、大きく3時期の集落が確認され、それぞれ主体とする地点を変え分布する状況がうかがわれた。</p> <p>縄文時代：調査区南部を主に分布する。後期中葉前半の土器棺墓を検出したほか、大小のビット多数を検出し、その中から後期中葉～晚期頃の方形建物1棟、円形建物を12棟を想定復元した。</p> <p>弥生時代：調査区北部を主に分布する。終末期の2本主柱を持つ大型竪穴建物を確認したほか、当期の可能性のある平地式建物を確認した。</p> <p>平安時代：調査区南部を主に分布する。前・中期の遺物が出土した。遺構は中期前半の区画溝、当期の可能性のある掘立柱建物1棟や畠耕作溝多数を確認した。</p>							

野々市市 新庄カキノキダ遺跡

発行日 平成31(2019)年3月22日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-229-1842(文化財課)

公益財團法人 石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 高桑美術印刷株式会社

